

すっかり暗くなつた空と、やけに明るくなつた町並み。今や日課となつてしまつた商店街の散歩。

夜遅くだというのに、まだまだこれからだと言わんばかりに活気づいてくる風景の中に居ると、少しだけ落ち着く事ができる。

「……で、つまり迷子つて事？」

「そう、みたいです」

そんな風景の中に、どう見ても場違いな存在があつた。

身長だけ見たら、まだ中学生にもなつていないんじゃないかと思うくらい。顔も子供っぽく、一人でふらふらと彷徨つていた事情を話す時にも言葉の端々に幼さが見える。だが、その髪は銀色に染まつていて、その双眸は真紅に彩られていた。

「携帯は持つていない。お金も持つていない。ついでに行く先の家の名前も忘れてしまつた。……野宿でもするつもり？」

「それは、嫌ですけど」

人混み、とまではいかないものの、それなりに人通りのある商店街に並ぶ店の、とある物陰に座り込んでいたこの少女。名前を『透子』というらしく、どうやら家出をしたらしい。

「大人しく家に帰つたら？」

「それも、嫌です」

「じゃあどうするのよ」

「……」

沈黙。要するに、何も考えていない。

このまま放つておくのはさすがに後味が悪いとか、夢見が悪くなりそうなのだが、本人曰く警察にも通報してほしくないのだとか。

「と言われてもね」

実際、今夜を過ごす場所すらまともに確保できていない。自分の家に連れていくという方法も考えられるけれど、すぐに出ていく保障が無い上に、あまり長居されると未成年略取だとかで捕まつてしまう。

「……いや、あたしも未成年だけど。」

「……あの、志乃さん」

「何？」

「わたしを、志乃さんの家に泊めてもらえませんか？」

「……えええ」

どうして今まさに浮かんで打ち消した考えを提示してくる？

「そんなに長い間居ようとは思っていません。だから、お願いします」

しかも心配しているところを的確に。エスパーなんだろうか？

「あのね。一応言っておくけど、あたしとあんたはさつき会ったばかりの他人なの。そんな人に簡単に泊めてくださいなんて言わない方がいいわよ」

「でも、他にいい方法が無いです」

「……じゃあ今から適当な家のチャイム慣らして、泊めてくださいって頼む？」

「ど、どうしてそうなるんですか」

「あんたが言ってるのはそういう事。たまたま声を掛け

てきたのがあたしだっただけで、たとえ他の人が来ていても同じように言っていたんでしょ？」

「そ、そうかもしれないですけど、でも、今は志乃さんからお願いしてるんです」

「だからそれはあたしがたまたま——」

「違います。志乃さんが、わたしに嘘をついていないからです」

「……は？」

「だって志乃さん、さつきから話して一度もわたしに嘘をついてません。志乃さんが正直な人だって分かっているから、頼んでるんです」

「何を言ってるのか分からないんだけど。会ったばかりの人に嘘つく必要なんて無いだけだし、そもそもなんであたしが嘘をついてないとかあんたに分かるのよ」

「それは、わたしが人の心を読めるからです」

「……」

……ああ、なるほど。イタイ子だったか。

家出なんてしてるから、そんな感じの人なのかとは考

えていたが、どうやら思考回路までぶつ飛んでしまっているらしい。

「?..?」

「なんでそんなに不思議そうな顔が……いや、もういいけど。それじゃ、大人しく家に戻りな」

「え、え?」

「いくら夏に入って暑くなってきたからって、このままここに居たら夜は寒くなるし、風邪ひくだけよ」

今はまだ開いている店もあるから熱気があつてそんな風には感じないが、しばらくすればそれらの店も閉まる。

「それに、こんなところにいつまでも居たら変な人に声掛けられるでしょ」

「変な人?」

「……あなたを危ない目に遭わせるような人よ」

「そ、そんな人がこの辺りには居るんですか?」

「割とどこにでも居ると思うけど。って、そんなのはどうでもいいから。それで、あなたの家はどこにあるの?」

「新市街の方です」

「よし。それじゃ行くわよ」

「どこにですか?」

「あなたの家」

「か、帰りたくないって言ったじゃないですか!？」

「でも行くあて無いんですよ?」

「そ、それは、そうですね。……だから志乃さんの家に泊めてくださいって」

「無理。あたしにだって生活があるの。あなたを拾ってもあたしにとつては損しか無いし、あなたにとつても時間しのぎにしかならない。親と何かあつたんなら逃げないでしっかり——」

……しっかり、どうするんだらう?」

「志乃さん?」

「え? ああ、だから、あなたが家出した理由なんて知らないけど、あたしに迷惑掛けるくらいならわがまま言わずに帰りなさいって事」

……何、言ってるんだらう、あたし。

「じゃ、じゃあいいです。志乃さんが泊めてくれるって言うまで、わたしはここから動きません」

「はあ？ 何がいいのか分からないわよ」

駄々っ子のように屈んでしまった透子。兄弟の居ない志乃だが、もし妹が居たらこんな子なのだろうか？

「志乃お姉ちゃん、お願いします」

「誰がお姉ちゃんよ。それに、さつきも言ったでしょ。ここに居ても危ないだけだって」

……あたしも、その危ない目に遭った一人なわけだし。

「……え？」

と、そこで突然、透子が弾かれたように顔を上げた。

「な、何？」

そして何故か志乃をじっと凝視してくる。その表情は最初、驚いたものだったが、次第に恐怖と哀れみと悲しみが混じった、複雑なものに変わっていった。

「志乃さん、両親と仲悪いんですか？」

「え、急に何を言い出すのよ」

「それで、家に居づらくていつもここを歩いて、たく

さんの人に囲まれて……」

「——っ!？」

「知らないところに連れていかれ——」

「やめなさい!」

「!？」

「……何であんたがそれを知ってるのよ」

「し、志乃さん？」

「あたしとあんたは初対面のはずよ。それに、あたしが声を掛けてきたのだったただの偶然。それともあんた、ここら辺に住んでる人全員の事調べてるの？」

「ち、違います。だから、わたしは人の心が読め——」

「ふざけないで! 勝手に人の過去調べ上げて、思い通りにならないからって古傷を抉ってくるのか、あんた自分かどれだけ酷い事してるか分かってんの!？」

「あぐっ!？」

「家出とか言ってたけど、本当はただそうやって目の前で誰かが苦しむ顔が見たかっただけなんですよ!？」

気づけば両手で胸ぐらを掴んでいた。透子の顔に苦悶

の表情が浮かぶ。

「……か、は」

「——っ!」

それを見て沸騰した頭が幾分冷えてくれた。まだ言いたい事はあるものの、持ち上げてしまっていた透子の体を下ろしてから手を離す。

「けほっ、けほっ」

「……ごめん」

「し、しのさ、」

「でも、あれは終わった事だから。思い出させたりとかしないで」

「……はい」

それ以上、口を開くのも億劫になり、しばらくの沈黙が続く。

「……」

「……」

いくら癪に障った相手であっても、放っておけば危険だというのは身をもって知っている。ここで感情に任せて

どこかへ行く気にはなれなかった。

「……」

「……」

さすがに十時を過ぎていたからか、周りに人は居ても先程の志乃の怒鳴り声も『夜中によくある事』の一つとして片づけられていた。……喧嘩しているのが不良ではなく、女子高生と特異な外見をした少女ではあったが。

「……」

「……」

「……あのさ、」

「は、はい」

「うち、来なよ」

「え？」

「行くところ無いって言ってたでしょ。あたしの家庭事情、知ってるんだったら別に家に入れても気遣わなくていいし、あんたも落ち着いたら家に帰るだろうから、それまでは居てもいいよ」

「あ、えっと、ありがとうございます」

「でも、なるべく早めに……ううん、何でも無い」
言い掛けて、やめる。さつきから何度もそうしている
気がする。

けれど、透子が親との関係で家出をしたのなら偉そう
に何かを言うのは間違いな気がした。

……未だに親から逃げて、こうして夜に出掛けてるんだ
から。

すっかり明るくなった窓の外と、やけに暗いままの室内。

今や日課となつてしまった優奈を起こす作業。

昼前だというのに、まだまだ眠り続けると言わんばかりに布団にくるまっっている妹の姿を見ていると、呆れた溜め息ばかりが出てくる。

「おい、起きろ」

「……」

当然、この程度では起きない。あくまで籠城戦を決め込むつもりようだ。

「今日は日曜日だし、起きてても何も言われないぞ」

「……寝ています」

こいつ。

「起きてんじゃねえか」

「寝てますってば。布団に入っていたら、保護者的には寝ているのと同じなんです」

「庇護者には意識があればもう起きてるんだよ。つか俺はお前の保護者じゃない」

「今だけです」

……将来ニート宣言、頂きました。

「とにかく、今の保護者は両方とも仕事に行ってるから、いい加減起きろ」

「む、それは現在この家には妹と兄さんの二人しか居ないという事ですか？」

「そうだよ。父さんはいつもの事だけど、母さんも付き添いだって」

「……仕方ないですね
もぞもぞ。」

布団の中の盛り上がりか形を変える。と、何故か優奈は顔だけを出してきた。

「兄さんも布団の中に入りませんか？ 今なら何の邪魔も入りませんか？」

「やかましい」
起きてくるのかと思ったら、なんて事を言い出すんだこ

いつは。
これ以上、優奈の愚図りに付き合っても仕方ない

ので無理やり掛け布団を引き剥がしに掛かる。

「な、何をするんですか。妹の何を剥ぎうとしてるんですか」

「布団だよ。一々変な感じにぼかそうとするな」

「やめてください。妹、下着姿なんです。布団を取られたらあられない姿を兄さんに晒す事になってしまいます」

「安心しろ。お前の下着姿を見たくらいでどうこうなるとも思えん。というか、お前が寝る時に下着を着けてない事くらい知ってる」

「な、兄さん、いつからそんな変態に。ついに妹の生活習慣を調査するくらいには目覚めてくれましたか」

「いや、着けなきゃいけないほどお前、胸が無いだろ」
「……………ぶふっ」

お、抵抗する力が無くなった。今の内に取り上げとくか。

掛け布団を持ち上げると、ベッドの上には自分の胸を抑えて絶望する。パジャマ姿の優奈が寝転がっていた。

腰辺りまで伸ばしたストレートの黒髪が横たわった

身体にまとわりつくように広がっている。低い身長も相まって、外見だけなら可愛い部類に入るかもしれないが、生活のだらしなさがその全てを台無しにしてしまっていた。

「今日はいい天気だからな。お前の布団も干しとこうと思つて」

言いながら、妹の部屋の閉め切ったカーテンと窓を開ける。

「うう、溶けます」

差し込む日の光を心底鬱陶しそうに、ベッドの上を転がる優奈。眩しそうに目を細めて近くに光を遮るものがないかを探すが、小さなぬいぐるみしかない。

「全く、この鬼畜兄は毎度毎度……」

諦めたのか、ぶつぶつ言いながらも体を起こす。といっても、ベッドから降りる気配は無い。

「それで、今日は何の用ですか？」

「いや、別に特に用なんて——いやいや、ちゃんとあるつて」

一瞬で不機嫌そうな表情になった優奈を見てすぐに改める。この妹が一度機嫌を悪くすると、しばらくは口も利かなくなる上に部屋の鍵を掛けてしまう。

「もう昼になるけど、腹とか減ってないかって思ったんだよ」

「兄さんが起こしに来なければ絶賛省エネ運転で晩ご飯まで大丈夫でしたよ」

「やかましい。どうせ夜中に勝手に冷蔵庫開けて何か食べてんだろ」

「そんな事してませんよ。太るじゃないですか」

「お前の場合、やせ過ぎだと思っけどな。そんなんだから身長とか胸の大きさが——」

「ストップです。それ以上はいくら兄さんといえど許せません」

「……もうほとんど言ったような気もするが、まあまだ許してくれるってんならこの話はこれくらいにしておこう。」

「とにかく、母さんがお金だけ置いてったから、どっか

食いに行こうぜ」

「遠慮します。まだ冷蔵庫にシュークリームが三個とエクレアが二個ありますから、妹はそれを昼ご飯にしておきます」

「んな偏った昼飯があるか。せつかく起きたんだからそのまま着替えて出掛けるぞ」

「起こしたのは兄さんですけど。それに、こんな日差しの強い日に外になって出たくありません。行くなら一人で行ってきてください」

「……分かった。それじゃ俺も行かない」

「え？」

「わざわざ休日に妹を家に置いて一人で外食とかするのも色々面倒だし、お前が行かないなら俺も行かない。ついでに昼飯食わないなら俺もそうしようかな」

ここで行く前に冷蔵庫を空にしたとしても、優奈はそれならそれだと昼抜きにして二度寝するだけだ。だが、こうして自分のわがままで誰かに——特に俺に——迷惑を掛かりそうになるとすぐに自分の考えを改めてくれ

る。

「……ずるいですね」

「お前が駄々をこねるからだ」

果たして、優奈はベッドからその身を降ろし、この家唯一のクローゼットの扉を開いた。

「……」

「相変わらず、すごい量の服だな」

しかも、そのどれもがロリータ服。特に黒基調のものが多い。

……今は身長低いから着れるけど、成長したらこの服、どうするつもりなんだろう。

「今、失礼な事考えませんでしたか？」

「いや、全然？」

「……ふう。それで、兄さんはいつまでこの部屋に居るつもりなんですか？」

「ん？ ああ、すまん。お前が二度寝しないかと思って見張ろうかと」

「とか言って、妹の着替え姿を網膜に焼きつけておこう

と？」

「んなわけないだろ。それじゃ、先に玄関行つとくからすぐに来いよ」

「乙女の外出準備がすぐに終わるわけがないでしょう。そもそも妹、寝起きなんです。兄さんなら我慢できますけど、このままで外に出ようなんて思いません」

「はいはい。それじゃ準備できたら俺の部屋来てくれ。……絶対寝るなよ？」

「それは、寝ておいて突っ込みを待つておけというフリ——」

ガチャ、バタン。

一時間後。

何だかんだ言いながらも手早く準備を済ませた優奈とともに、電車で二駅先の新市街にやってきた。

誠や優奈が住んでいる坂本家は、木戸市の中でも都心に近い新市街から商店街を挟んだ向こう側、住宅街に位

置する。名前の通り、一軒家や安価な賃貸があるばかりの静かな町だ。

そのため、外食するとなると商店街まで足を延ばすか、そのさらに向こうの新市街へ行くかになる。

「しかし、相変わらずお前の服装は人目を惹くな」

「気になるなら今からでも妹は帰りますが？」

いくら都心の街中であろうと、さすがにゴスロリ服を着た少女が歩いているのは異様に見える。

「ところで兄さん。行こうと思ってる店とかはあるんですか？」

「ああ、取り敢えずいつもの店にしようかなって思ってる」

いつもの店、サイゼリー。

住宅街にはとにかく家しかない。誠も優奈も、通ってる高校、中学は新市街にあり、誠は帰りがけに友人とここへ食べに来たりする。

「ワンパターンですね。別にいいですけど」

「たまには新しい店とか開拓してもいいけど、こう暑い

とさつさと冷房利いた店内に入りてえ」

「じゃあなんで外出しようなんて……もういいです」

お互い、暑さで無駄口を叩く気にもなれないまま、歩く事数分。

ようやくサイゼリーに着き、席に案内されたところで優奈が口を開いた。

「妹、思ったのですが」

「何だ？」

「休日の昼間に若い男女が二人きりでランチ。これは立派なデートなのでは？」

「馬鹿な事言ってるんでメニュー選べ」
ただの間抜け話だった。

昼食を終えて店を出ると、時刻は二時。日中で最も暑くなる時間。

「あつづー」

「気持ち悪い声出さないでください」

「お前はいいよな。日傘さしても外見的に何となく許されるし」

「妹だけじゃないですけどね。女性は日焼けが大敵ですから」

言われてみれば、確かに優奈以外にも日傘をさしている人は居る。が、当然ながら女性ばかりだ。

「俺がやってたらただの変態にしか見えなからな」
「いいじゃないですか、変態。どうせならそのままシスコンという変態にも目覚めてほしいです」

そう言いながら日傘を渡してこようとす。

それを躲しながら、不敵に笑みを浮かべる優奈を見ていると、ふと思った。

「優奈」

「はい？」

——まだ、学校に行くのは無理か？

「……」

「……何ですか？」

「……いや、何でもない」

訊こうとして、けれど訊かない。

訊けば今度こそ、優奈は誰も味方が居なくなる。それだけ、絶対に駄目だ。

「いえ、そんな訊きかけてやめるなんて気になる引き方しないでくださいよ。何かあったんじゃないですか？」

「大した事じゃない。よく考えなくても訊く必要のない事だった」

「……妹、時々読心術を会得したいと思います」
「やめとけ。そんなん身につけても知りたくない事知って気分悪くなるだけだ」

他人の本心が分かるのも、自分の本心が悟られてしまうのも、そうそう許容できる事じゃない。

「でも、そうすれば兄さんが妹の事をどう想ってくれてるかも分かりますから。あとはその想いが理性を壊してくれるように誘導するだけで済みます」

「それなら前から言ってるだろ。お前に対しては妹という事以外の感情を持った事は無い」

「いえいえ。そんな事務的で突き放した態度も実は好意

の裏返しで……」

「ないな」

「そんな即答で断言しなくても！」

憤慨したのか、日傘の露先で突いてくる。その姿だけ見た人は、優奈が一年以上不登校を続けているなんて信じないだろう。

「……はあ。それで、この後はどうします？」

「そうだな。せつかくこつちに来たんだから、ただ食べるだけで帰るのもつまんないよな」

「いえ、つまらなくはないです。すでに用事は済ませたんですし、他にやる事が無いのでしたら帰りましょう」

「お前……どうせ帰ってもやる事無くて寝るだろ」

「失礼ですね。珍しく昼から活動してるんですから、ネトゲの王でも夜を待たずに降臨させようかと思っただけですよ」

「やかましい。誰がネトゲの王だ」

優奈は今の夜型生活になってからオンラインゲームにハマっているらしい。以前、一度プレイしているのを見

た事があるが、変な怪物に囲まれて袋叩きにされ、そのままゲームオーバーになっていた。

「あの頃と一緒にはしないでください。もうレベルもかなり高くなって、そこらのプレイヤーと対戦しても勝てるほどにはなりましたよ」

「立派に廃人ルートをたどろうとしてんじゃねえ。……まあ、今日はこのまま晴れ続けるだろうし、やっぱ帰るか」

「お、それも妹の事を気遣ってのさりげない言葉ですか」

「さりげなくはないがな」
とはいえ、最近は全く外に出ていない優奈だから、そろそろ疲れてきているはずで、結局その日は帰る事になった。

翌日。

「週明けの一時間目ってなんでこんなにだるいんだろ」
いつもと変わらない平日登校後、席に着いた誠は呪うよ

うに呟いた。

今朝も優奈を起こしに行つたのだが、やはり登校日には何がなんでも起きたくないらしく、布団から出てこようとしなかった。正直、羨ましい。

「それはだね。誠くんが日々の青春をつまらなく過こしているからだよ」

「……よう、ビン底眼鏡。月曜日だつてのに今日は元氣そうだな」

憂鬱そうだった誠の表情がさらに鬱々しくなっていく。

彼の名前は瀬ノ内康太。誠のクラスメイトであり、校内での数少ない話し相手だ。……決して、友人ではない。かなりの気分屋で、その日によつてテンションの浮き沈みが激しい。ハイな時は鬱陶しくらいだが、沈んでいる時は一日中机に突つ伏している事もある。

「昨日は水泳部の練習風景を盗さ……映像として記録できたからね。彼女達が努力している姿を形として残せた事が嬉しいんだ」

ついでにかなりの変態だ。

「おい犯罪者。お前が機嫌いいのは分かったが、だからといって俺のところに来るな。目障りだ」

「つれない事言わないでくれ。僕のこの溢れんばかりのリビドーを綴つたメロデーを聞いてくれるのは校内でも君だけなんだ」

「聞き流してただけなんだが」

「ああ、それにしても昨日は本当に素晴らしかった。昨夜は一晩中、成功品を愛でていたから精は尽きそうだが根が爆発しそうなほどにたぎっているんだ」

「そのまま昇天してろ」

うねうねと身もたええる康太を視界から外し、適当に教室内を見回す。

それほど早く登校しているわけでもないのです、すでに何人かの生徒がグループになつて話し込んでいます。中には一人で読書している生徒や、学校で二度寝をしようとして登校しただけの生徒がいたが、どの生徒にしても誠には一人として顔なじみが居ない。

もう高校二年生の六月ではあるが、一年の頃から他人

と関わりなかつた誠としては当然の感覚だつた。むしろ、康太のように何度も話す事のあるクラスメイトの方が珍しい。

「そうだ。普通なら僕一人で全てを使い切るんだが、特別に君にもいくらか譲つてやろう」

「要るか。そんなのもらつても使い道無いし、見つかつたら面倒になるだけだろ」

「む。聞き捨てならないな、誠クン。使い道が無いとはどういう事だ」

「どういうつて、そのままだ。女子のスクール水着姿を写真で見ても盛り上がりらんし、そもそも一人暮らしのお前と違つて俺の場合、家でそんな事してるのが見つかつたら悲惨だろうが」

「男のくせに小さい事を。大体、スク水だからいいんだろう。どうしてそれが分からない？」

「黙れ変態。毎度毎度、自分の趣味を押し付けようとするな」

そして鞆から写真を取り出そうとするな。

取り敢えず康太の鞆を手元に寄せておくと、一瞬何かを勘違いして笑つた後、すぐに悲嘆に暮れてしまった。

「時に誠クン。優奈さんは元気にしてるかい？」

「ああ、今日も元気に不登校してるよ」

「それは何より。しかしそうなることやはりあれは見間違いか」

「何がだ？」

「一昨日の事なのだが、商店街で盗ちよ……市内安全を警戒していた時に優奈さんを見掛けた気がしたんだ」

「……やっぱりお前一度捕まつた方がいいぞ。つて、一昨日？ 土曜日だし、もしかしたら夜中に出掛けたかもしれないけど、あいつは基本一人では外出しねえよ」

「では他人のそら似だつたという事だな。髪を染めていて、しばらく見ないうちにエキセントリックになつたものだと思つたのだが」

「昔からあいつ黒が好きだから絶対に染めたりしないだろうな」

今みたいに不登校児になる前から、優奈の趣味は変わつ

ていないし、服の色も全体的に暗い感じのものばかりだ。

「ふむ。まあ優奈さんは僕の好み。ストライクゾーンと真ん中だからね。そんなのが二人も居たら発狂死してしまっよう」

「だから死んでしまえと言ってるだろ。しかも人の妹に手を出そうとか考えてんじゃねえ」

「全く、本当に冷たい人間だな、誠お兄ちゃんは」

「……」

「待て、悪かった。まだそのデータは複製を作っていないんだ。だから壊さないでくれ」

康太の鞆からカメラを取り出すと、その持ち主はすかさず白旗を掲げた。こういう瞬間の状況判断力が、康太を逮捕という未来から救っているのだろう。

「相変わらず、馬鹿な事やってんのね」

と、そこにもう一人の数少ない話し相手、澄谷志乃がやってきた。

彼女も誠と同じように他人との接点をとことん絶ってきた生徒で、似た者同士で集まったような関係のクラ

スメイトである。

女子にしては高めの身長に、肩に掛かるくらいのショートカット。スレンダーな体つきをしている事から運動神経が良さそうな容姿をしている。実際に体育でもチーム戦になった時は頼りにされているみたいなのだが、興味が無いらしく部活には入っていない。

「よ。お前も相変わらず、始業ぎりぎりの登校お疲れ様」
「新市街に住んでるから徒歩で来れるというのに、いつも遅刻しそうになるのが僕には理解できないがね」

「徒歩で来れるからよ。いつ家を出てもいいんだし、早めに来てもする事無いじゃない」
そう言いながら、肩に掛けた鞆を誠の隣の席の上以降ろす。

志乃が隣で、康太が前の席。狙ったわけではないが、二年になってから最初の席替えでこの形になった。一年の時にも同じクラスだった誠達は、名字が坂本、澄谷、瀬ノ内と続いていたために知り合いになった関係だ。色々偶然は重なっているが、席が近くなったのは少な

くとも誠と志乃にとつては良かった。その方が隣席に気を遣わなくて済む。

「しかし、志乃くんはそんな遅刻間際になるまで家で何をしているんだ？ 君の事だから寝ているわけでもあるまい」

「あたしの何を知ってるのか知らないけど、別に何でもいいですよ」

「君の事なら大抵は知っているぞ。誕生日は五月九日。血液型はB型で、身長・体重・スリーサイズは上から順に——」

「黙りなさいこのストーカー」

「いふっ」

瞬時に志乃の蹴りが康太の腹にめり込む。空手をしていたらいいところまでいけるかもしれない。

「そーいや五月だったな、お前の誕生日。今年も何も祝えなくてすまん」

「忘れてたんだから仕方ないわよ。それに誕生日なんてそんなに特別な日でもないし」

「……ま、そう言ってくれるんなら助かる。で、この死体はどうする？」

「放つとけば？ もう授業始まるから、その時には復活してるでしょ」

※

「ただいま」

マンションの一室。自分の家のドアを開けて、返ってくるはずのない挨拶をする。

中学に入る頃にはもうそんな状態になっているのに、

ついそれまでの習慣で口にしてしまう。今となつては誰かに向けてではなく、家に向けて言っているような感覚でしかない。

「お帰りなさいです」

それなのに、今日はそのいつもとは違った。

奥の方にある志乃の部屋から出てきた少女が、五年ぶりに返事をしてくれたのだ。

「……」

「????? あの、志乃さん? どうしてそんなに驚いてるんですか?」

「え、ああ、うん。そういえば透子が居たんだっけって思つて」

「忘れられてたんですか」

「長い事、一人暮らしみたいな生活送つてたからね。それより、大人しくしてた?」

「あ、はい。志乃さんが貸してくれた本を読んだらあつという間に時間が経つてました」

「本って、あれは漫画だけだね」

透子はただでさえ目立つ外見をしている。そんな彼女が街中を歩いていけばほとんどの人の目に留まり、すぐに家に連れ戻されてしまうだろう。

だからといって半日家の中に詰められているのもつまらないかなと、暇潰しにでもなればと思つて漫画を貸したのだが、初めて見るものだったらしく、志乃が学校に行く直前になつても面白そうにページを捲つていたのを覚えている。

「けど、漫画を見た事が無いって、よっぽど厳しいしつかけをされてきたのね」

どこかの本屋に立ち寄るだけで見掛けるようなものなのに。

もしかしたら透子はかなりのお嬢様なのかもしれない。家の事は訊いていないから詳しくは知らないが、拾つた時はそれなりに上等そうな服を着ていた。学校にも通つていないらしいから、専属の家庭教師をつけて学んでいたのかも考えられる。世間の事にも疎いように見え、いわゆる箱入りと呼ばれる存在だったりするのか。

「箱入りって、あの漫画での朱音さんの事ですか？」

「……そうだけど、透子。心を読むのやめなさいって言ったでしょ」

「す、すいません」

申し訳なきそうにする透子。その様子からは、悪意のよ
うなものは見えない。

……やっぱり一昨日のあれは、本当にあたしが思い出し
てたのをそのまま言っただけだったんだ。

昨日、透子を家に入れてから一夜が明けて、改めて透
子の話を落ち着いて聞く事にした。

といっても、家の事は志乃としても訊きづらいものであ
ったので専ら話題は透子の読心能力についてだった。

「つまり、あなたは近くに居る誰か、あるいは視界に入
る人の考えている事や本心が分かる、と」

大方の事情を聞いた時は、またそんな馬鹿な事をと呆れ
た気分させられた。

「あんたね、それならあたしが今何を考えてるのかとか
分かるの？」

だから、大抵の場合と同じく、志乃はそんな質問をして
みたのだ。

「えつと……『今夜の晩ご飯、どうせ父さん達は今日も
帰るの遅くなるだろうし何を食べようかな。この子の事
も考えると、二人分の食材を買ってきて家で済ますのが
一番かな』です？」

すると、透子は少しの間じっと見つめてきてから、志乃
が考えていた他所事を言い当てた。

そんな事があったので、未だに半信半疑ながらもひと
まずは透子の言う事を信じる事にしたのだった。

本人曰く、意識せずとも相手の心が読めてしまうらし
いので、読むと言われても困るそうだ。考えている事
が筒抜けになっているのは気分のいいものではないが、
志乃だって呼吸を止めると言われて止められるわけ
はないため、未だに慣れないものの取り敢えずは放つて
おく事にした。

「ところで透子。昨日から一度も外に出てないし、あた
しの古着ばっかり着ても似合わないから、今から服買

いに行かない？」

「服、ですか？」

しかし、心が読めるといっても、それ以外は世間知らずの十三歳の少女。着の身着のままで家出をしたので替える服ももちろん持っていない。今は志乃が小六の時に着ていた服を着ているが、それほど何種類も残しているわけではないというのが現状である。

「でも、昨日はあまり外出しない方がいいって」

「うん。あたしもそう思ったんだけど、髪を服の中に入れて帽子でも被ってたらばれないんじゃないかな。あんなの特徴っていったらその銀髪と紅い眼だし」

さすがに帽子にサングラスをしていると逆に目を惹いてしまいそうなので、瞳の方はそのうちカラーコンタクトでも買つてこよう。

着替えるのも面倒だったので、制服のままに出掛けてから数分後。

「……すごいです」

近所のショッピングモール内にあるファッションコーナーに行くとき、透子は感嘆の声を漏らした。

「こんなに綺麗な服がいっぱいあるなんて。素敵なんですよすね！」

「服を買いに行つた事も無いんだ、あんた」

やっぱりお嬢様なのだろうか。だとしたらそのうち黒い服の人達が志乃を囲むなんて事が起きるかもしれない。

……そうなつたら、またあいつは来てくれるかな。

思わず自嘲の笑みがこぼれる。二年前のあの時もそうだったが、本当に自分は自業自得になりそうな事ばかりしている。

「志乃さん志乃さん。この服、とっても綺麗ですよ！」

「店内ではしゃがないで。つて、ワンピース？」

物思いに耽っている間に透子が持ってきた服は、白のゆつたりとしたワンピースだった。

「無駄な装飾とかなくて、確かにいいとは思うけど」

透子の手にあるハンガーから下がっている値札を見る

と、三千円弱。何着か買おうと思っていた志乃としては、悩みそうな値段だった。

「わたし、これが欲しいです」

「うーん、コンタクトも買いたいし、せめてあと千円安かったらなあ」

親からの小遣いだけで生活しているため、二人分になった食費の事も考えるとあまり無駄遣いはしたくない。が、せつかく透子が欲しいと言っているのだから、今さら安売りのものを勧めるのも後味が悪くなりそうだ。

「お客様。試着なさいますか？」

そうして悩んでいるうちに、店員の一人が声を掛けてきた。

「あ、そうですね。それじゃ、お願いしま——」

「いえ、いいです。わたし、他の服も見てきますから」

……え？

志乃が振り向くと、透子は持ってきた服を元の場所に持っただけで立ち去っていた。

「ちょっと、透子？」

店員に礼を告げてから、追いかけて話し掛ける。

「さつきまで買ったがってたじゃない。どうして……あ、」

「……」

服を戻し、今度はしきりに値段を気にし出す透子。その表情は、拗ねている様に見えるもない。

「……もう」

何というか、ここまで分かりやすいと能力なんて無くても察する事ができた。

「透子。またあたしの考えてる事、読んだでしょ」

「……はい」

「……まったく、素直すぎるってのも考えものね」

まだ少しの間しか一緒に生活していないが、それでも透子について分かった事がある。彼女は隠し事が下手らしい。というより、嘘をついたり、騙したりする事をしていない性格なのだ。だから、どんな事でも訊かれれば素直に答えてしまう。

「あの服、買いたいと思ったんでしょ？」

「欲しいですけど、志乃さんに買ってもらうわけですし、あまりわがままばかり言っても……」

「何今さらな事言ってるの。あんたがわがままなのは知ってるわよ」

「やれやれといった心持ちで、ついさつき透子が持ってきた服を取り出す。

「大体、そんな風に遠慮されてもそれはそれで後味悪いじゃない。せめて一度試着してからにしてもらわないと」

「でも……」

「とにかく着てみなさい。ちよつとくらい高くても似合ってたら買ってあげるから」

「……はい」

受け取り、そのまま試着コーナーへ。わがままばかりではあるが、そこまで意固地というわけではないらしい。

「あ、どうせなら髪も出して見せてね」

「え、大丈夫なんですか？」

「そこから出なければ大丈夫よ」

と、そんな会話があってからややして。

試着室の仕切りからおずおずと顔を出してきたので、志乃の方が覗くような形で見ている事になった。

「ふうん。自分で選んだだけあって、似合ってるじゃない」

まだ子供でありながら、清楚さを感じさせる白の風合いが、幼さの残る透子の可憐さのようなものを引き出してくれている。

「こういう服、あまり着た事がなくて。良かったです」

「そうなの？ まあ、約束だし、それは買う事にしましようか。……あ、でもちよつと待っていて」

「志乃さん？」

一度仕切りを完全に閉じ、春物の売れ残りがあるコーナーの方へ。

ほどなくして透子のところへ戻り、取ってきたものを着てもらった。

「ど、どうですか？」

「うん、これから夏だから必要無いかとも思ったけど、やっぱりこっちの方がいいかな」

志乃が持つてきたのは薄いクリーム色の羽織りもの。値段は千九百八十円。

思いつきで選んだにしては、組み合わせも悪くない。自分にファッションセンスなんてものがあるとは思っていないが、これは中々いいチョイスだったかもしれない。

「二つ合わせても五千元にならないし、気にいったんなら一緒に買うけど、透子としてはどう？」

「こっちの方がいいなと思います。ゆつたりとして着やすいですし、ワンピースだけよりもおしやれしてる感じがします」

「そう。ならこれにしようか。他の服を買う分が無くなっちゃうけど、それはまた今度にしようか」

購入を決めて、髪だけ服の中に入れて帽子を着けてもらってからレジに向かう。

「あの、ありがとうございます」

支払いを済ませて店を出ると、透子が頭を下げて言った。こういうところはしっかりとしているようだ。

「いいわよ。さて、服も買ったし、今度は晩ご飯でも買

つていこうかな」

「わたし、ハンバーグが食べたいです」

「はいはい。せっかく大人しい服着てるのに、やっぱり中身は子供ね」

その後、必要な食材を一通り買い揃えて、あとは帰るだけとなった。

「あれ？」

透子がそんな声を上げたのはそんな時だった。

「どうしたの？」

「いえ、あそこの男の子なんですけど」

「???? ああ、あの子ね」

透子が指差す方向には確かに、小学生らしき男の子が居た。スーパーのお菓子売り場で、何を買おうか悩んでいる様子だが、彼がどうかしたのだろうか。

「あの人、万引きしようとしてます」

「え？」

「さつきから、誰かが自分の事を見ていないかを気にしてタイミンングを見計らってますし、そういう事ばかり考えてます」

「あまりそういう風には見えないけど」

「とはいえ、読心ができる透子がそう言うのならそうなのだろう。昨日の時点では半信半疑だったが、先程の服を買う時でも体験したのだし、志乃もそろそろ本気で信じるようになっていた。」

「どうしますか？ やめるように言いますか？」

「それでもいいけど、そうしちゃうと今日は止められてもまたやろうとするかもしれないわね」

「でも、放っておいたら捕まっちゃいますよ」

「そうね。それじゃ、盗んだのを確認した後で声を掛けて、ばれる事もあるって自覚してもらおう事にしましょうか」

これが初めてなのかは知らないが、万引き直後に声を掛けられるのはかなり動揺するはずだ。そこで指摘されてしまえば、今後はばれるかもしれないという恐怖で万引

きなんてしなくなるだろう。……彼がよっぽど気の強い子でもなければだが。

「とにかく、ここからだとの子からもあたし達が見えるし、場所を変えましょう」

という事で、透子を連れて男の子から少し遠くへ移動する。商品棚が陰になって、お互いに見えづらいが、時々確認する程度でいいのでここで大丈夫だろう。

「なんだか、万引きGメンをやってるみたいね」

「何ですか、それ？」

「万引きを防ぐ仕事をしている人達の事」

「ああ、確かにそうですね。Gメンって、ちよつとかっこいい響きです」

そうかな。そもそもあたし達は女の子だからメンじゃない気がする。というか、Gって何の略なんだろう。

「ガードじゃないでしょうか」

「なるほど。って、こら。今はあたしじゃなくてあの子の方を読んで下さい」

「は、はい」

そうして張り込んでから数分後。男の子は本当にお菓子を盗んだ、らしい。

らしい、というのには、志乃が見ている分には全く気づかなかつたからだ。透子が言うには右ポケットにガムを一ケース入れているそうなのだが、ここからではそんな膨らみがあるようにも見えない。

「けど、どうして万引きしたのなら店を出ないんだろ」
見つかるかと思っているのなら、すぐにでも出ようとすると思うのだが。あるいは、他にも何かを盗ろうとしているのだろうか。

「いえ、すぐに出ると疑われると思ってるみたいです。何も買わないわけですから、それなりに迷っているふりをして、結局欲しいものが無かったという感じで帰ろうとしてます」

「そこまで考えてるの？」
まだ小学生だというのに。一体どれだけ繰り返したらそんな風に考えられるのか。

「とにかく、このままだと逃げられるし、もういいでし

よ」

これ以上待たせていても仕方ないので、男の子のところへ行き、声を掛ける。

「ねえ、あんた」

「な、何？」

「ちよつとポケットの中にあるもの出しなさい」

「——っ!？」

見るからに怯えた表情をする。やはり透子の言った通り、この少年は万引きをしていたようだ。

「ど、どうしてだよ」

「さつき、ガムをポケットに入れたでしょ。それ、万引きっていつて立派な犯罪なのよ」

「……俺はそんな事してない。お姉さんが言ってる事はでたらめだ」

「そう。それならちよつとポケットの中を調べさせてくれる？」

さらに一步、男の子へ近寄ると彼の方も一步下がる。

「どうしたの。何もしてないなら逃げなくてもいいでし

よ」

「い、いきなり詰め寄られたら誰だつて逃げるつて。大体、お姉さん、何なんだよ。ここの店員とかじゃないだろ」

「まあね。単にあんたが万引きしてるところを見掛けた客の一人よ」

「だったら一々突つ掛かつてくるなよ。俺が何したつて関係無いだろ」

「……つべこべ言わずにさつさと盗つたものを返さない。それとも、今からその店員を呼んであげましょうか？」

「——っ!？」

「あんたが万引きしてるつて分かったら、警察を呼ばれるかもしれないわね。それでもいいなら、そのまま帰つたら？」

「け、警察……」

徐々に反抗的になってきたものの、警察と聞くとまた最初のように怯え始めた。割と強気な性格だったが、こう

なるとあとは簡単だ。

「今ならそのポケットの中のを元に戻すだけで済むけど、どうする?」

その言葉を最終通告と取ったのか、男の子は恐る恐るといった動作で、透子が言っていた通りの右ポケットからガムを取り出して同じ種類のものが並ぶ場所に戻した。

「これで、いいですか」

「……もう、絶対こんな事したら駄目だから」

「は、はい」

「……」

反省しているかは分からないが、それでもこれ以上は何を言おうとあまり意味は無いだろう。

「行くよ、透子」

後ろに居た透子に声を掛け、帰ろうとした。その直後、店内に乾いた音が響いた。

「……透子?」

振り返りかけていた体を再び男の子の方へ向けると、透子が彼の頬を叩いていた。

透子が暴力をふるった事にも驚いたが、どうして話がついたと思ったというのに彼女はそんな事をしたのか。

「だって、この子、ずっと心の中で志乃さんの悪口ばかり言っていました！ 早くどっか行けだとか、ウザいんだよとか！」

「は、はあ？ 何言い掛かりつけてんだよ」

「言い掛かりじゃないです！ それにあなた、ちっとも反省していない！ わたし達が帰ったらまたやるつもりだった！」

「なっ!？」

どうしてそこまで？

透子じゃなくても、彼がそう考えているのが志乃にも分かった。

「お金だつてあるのに、払うのが面倒なんて理由で万引きしようとして、その上志乃さんの悪口ばかり言つて」

「お、お前、何なんだよ。どうして俺の考えてる事が……」

……

「そんな事どうだっていいです。志乃さんに謝つてくだ

さい。じゃないとわたし、あなたを許しませ——」

「いいよ、透子。もう行こう」

だが、透子がさらに一步詰め寄ろうとしたところで志乃がその肩に手を置いた。

「……志乃さん？」

この男の子が反省していないかもしれない事は、途中の強気な態度から想像していた。

ただ、そうだったとしても、これ以上この場で何かを言つたところで無駄でしかないだろう。そういう人は、実際に痛い目に遭わないと更生しないのだ。

「それに、さっきの平手の音で周りに人が集まってきたしね。いくら帽子で隠しても目立ったら意味無いだよ」

そもそも、今志乃が欲しいのは彼からの謝罪ではなく、透子の存在が周知になる事を防ぐ事だ。騒ぎが大きくなって、透子の事が広まってしまうのは避けておきたい。

「でもっ」

「いいから」

なおも怒りが収まらない様子の透子を半ば無理やり店の外へ連れ出す。

最後に一瞬だけ見た男の子は、ただただ呆然とお菓子売り場で立ち尽くしていた。

翌日。

「はあ」

「盛大な溜め息だな」

四時間目が終わり、昼休みに入ると同時に隣の席から漏れた憂鬱な吐息に目を向けると、志乃が頬杖をついていた。

「勉強が分からない……わけないよな。いつも平均点以上は確実に取ってるし」

定期テストのたびに三人で点数を見せ合っているが、誠は二人に勝てた試しがない。ちなみに、学年での順位は康太が一桁、志乃が二桁、誠が二百番台で定着している。

「ねえ、もしもなんだけどさ。もし、あたしが人の心を読む事ができたらどうする？」

「なんだよいきなり」

「だから、あたしが他人の考えてる事とか、本心が分かるような能力を持つてたら、あんたならどうする？」

「どうするって、中々答えにくい質問だぞそれ。……つか最近それと同じような事を言っていたやつが居たな」

俺の妹の事だが。まあ、あいつがそんな能力を持つていたら不登校が治るか、その原因になった人間不信がさらにこじれて完全な引きこもりが完成するかどうかだろうな。

「そもそもそんな質問をしてる時点でお前にそんな能力が無いってのは分かるんだが。なんでそんな事訊くんだ？」

「なんとなくよ。それじゃ、たとえば康太とかがそうだったらどうする？」

「取り敢えず色々と暴露される前に抹殺する」

「……たとえに使う人物を間違えたみたいね」

「君達、さつきから酷くないか？」

と、そこでようやく康太が話に加わってきた。さつきまで何かを作っていたようで、今は一段落したようだ。

「いや、お前だったら誰かの恥ずかしい秘密とかを放送室ジャックして校内放送で言ったりしそうだからな」

「そんな事誰がするものか。やるならテレビ局をジャックするさ」

「それ犯罪だからな」

こいつの場合、読心なんてできなくても抹殺するべきかもしれない。

「それに僕が他人の考えている事を読めるなら、カジノに行くか、女子を脅迫するかしからないだろうね……どうして誠クンは椅子を持ち上げているんだい？」

うん。やっぱり殺しておこう。社会のために。

「と、冗談はこれくらいにしておいて。実際にそんな能力を持つているやつが居たら、俺なら関わらないようにするかな」

「どうして？」

「自分の考えてる事が筒抜けになるんだぜ？ 話すだけでも心の中をかき回されるような感じがするだろうし、俺ならそいつから距離を取るな」

「なるほどね。じゃあ、誠がその能力を持っていたら？」

「さつきから何なんだほんとに。……つつても、どうするかは分かんねえな。例えば今から読心能力に目覚めたとしたら、康太のように悪巧みに使うかもしれない。けど、生まれつきだったなら人格歪みまくるんじゃないかな」

「……え？」

「だってそうだろ。昔から人の黒い部分ばかり見て育つてたら厭世的になるか、精神崩壊した上で日常生活を送るかくらいだと思っけどな」

「……」

「志乃？」

急に押し黙ってしまった。そこまでショックを受けるような事を言っただろうか。

「それにしても突然そんな事を訊いてくるとは、志乃クンの周りにそういった人物でも現れたのかね？」

「え、……そんなわけではないでしょ」

「何だい、その反応は。思わせぶりの態度を取って僕達を惑わせようとしているのかな」

「安心しろ。そんな能力が実在するわけないから、釣られたりもしない」

「……それもそうね。康太くらいなら騙せるかとも思っただけ」

「君は僕の事を何だと思っているんだ」

昼休みが終わり、五時間目のあとの、六時間目。

「それじゃ、二期の学祭についてだが……」

誠達のクラスの担任が黒板に文字を書きながら、二期の文化祭についての説明をしていく。

気が早いとも思うが、基本的に夏休み中に準備をする事になるのだから、この時期から話を始めていくのが恒例らしい。

「……というわけで、うちのクラスは三年五組と、一年四組とのグループになった。今後、各学年の代表で話を決め、それを自分のクラスに伝える指導者が必要になるわけだが、誰かやってみたい人は居るか？」

.....

教師の質問に対し、生徒からの返答は、沈黙。

元々消極的な生徒が多いクラスであり、且つこういった話し合いではよくある『目立ちたくない』という感情が立候補しようという気持ちを失くしてしまうのだろう。

「……あー、誰か居ないのか？」

困ったような声。最終的に立候補者が出なければ委員長あたりが抜擢される事になるが、担任としてもできれば自発的にやってもらいたいと思っっているはずだ。

そんな思惑から、静まり返る教室内。しばらくして、このままで居ても議事が進まないと判断したのか、五分ほど生徒達で話し合う事になった。

「誠、やってみたら？」

「なんで俺が。指導者なんてクラスのやつらだけじゃなくて他の学年のやつにまで気を遣わなくちゃいけないんだぜ。そんなのやつてられないって」

「なら、やはりこの僕が——」

「却下。お前にさせたら文化祭自体が中止になるだろ」

「じゃあ僕が先程完成させたこの催眠暗示装置はどこで使えばいいと言うのだ」

「再起不能にした後で捨てる」

朝からずつと何か作ってると思つたら、そんなもの作つてやがったのか。

「しかし、志乃クンはやろうとは思わないのか？」

「それこそ、なんであつたが。康太みたいに主張があるわけでもないし、誠みたいに本気出したらやる時はやるって感じでもないのに」

「いや、俺はそんなやればできる子みたいなやつじゃないんだが」

志乃の中では俺はそういうやつだと思われていたのか。

「そうだな。誠クンはやればできる子、だけどやらない子だからな」

「典型的すぎるだろ。つか、だから俺はそんなんじゃないって。それに……」

「……誠？」

「それに、どうせ誰かがやってくれるだろう」

「その言葉も十分典型的だと思うのだが」

「うるせえ」

返して、誠はそれ以上会話を続ける気になれずに机に突っ伏した。

「よし、誰か決まったか？」

やがて五分が過ぎて、担任が再び問い掛けるも、返ってくるのは相変わらずの沈黙。

「……あー、それじゃ、指導者についてはまた来週決める。各自で考えといてくれ。それじゃあ、次に……」

結局、その日は誰も立候補する事なく、担任の議事進行で話が進む事になった。

「……」

……それに、俺は決めたんだ。二度と他人に干渉しないわ。

「ただいま」

住宅街の一角、『坂本』と表札に書かれた一軒家のドアを開けて、いつもの挨拶をする。

両親が共働きの事から、誠が帰ってきた時には家に優奈しか居ない事が多い。その優奈もまた二階の自室に引きこもっている事が多いので、普段はこの挨拶に返事がない。

「お帰りなさい」

だが、今日は母が居たようで、リビングの方から声が出てきた。

「母さん、帰ってたんだ。って、優奈？」

誠の部屋も二階にあるのだが、母が居るのなら顔を出しておこうとリビングへ行くと、何故か自室に居るはずの優奈が、母と向かい合うように座っていた。

「……お帰りなさい、兄さん」

「ああ、ただいま」

誠の方を向くでもなく、顔をうつむけがちにしたままの

優奈。それを見て、どうしてここに妹が居るのが分かった。

「誠。ちよつと今は優奈と大事な話をしてるから、あんたは部屋に戻ってなさい」

「……分かった」

降ろしかけた鞆を持ち上げ、部屋に行く。

「……」

が、荷物を部屋に置いてからすぐに階段を上ったところまで戻った。

「それで、さっきの話の続きだけど」

リビングのドアを開けっぱなしにしてきたから、二人の声がここまで届いてくる。

盗み聞きをしているわけだが、さっきの優奈の様子を見てしまつては、罪悪感など全くない。

「優奈もこのままじゃいけないとは思っているでしょう？ 今の学校が合わないなら、他の学校に行つてもいいのよ。」

「……どここの学校に行つても、変わらないですよ」

「そんな事言つて。だったらどうするつもり？ 言つとくけど、中卒でどうこうできる世の中じゃないわよ？」

「……」

「それに、たとえ勉強して高校に入れたとしても、また不登校になつたら今度は退学になるのよ。」

「……」

「大体、未だにどうして学校に行かなくなったのかも教えてくれないのに。いつかは復学してくれるのかと思つていたけど、いつまで経つても学校を休んでばかりで、もう一年経つちやつたんだから」

「……」

「小学生の頃にも不登校になった事があつたけど、あの時と同じ理由なの？ せっかく中学に入つて通い直し始めたと思つていたのに」

「……」

「これ以上サボり続けるのだったら、やっぱり転校した方が——」

「母さん。それくらいにしたら？」

我慢の限界だった。

優奈がずっと黙っていたのも、誠が我慢していたのも、母が本当に優奈の事を想って言っている事だというのが分かっていくからだ。

それでも、言い過ぎてしまえば優奈はさらに自分の殻に閉じこもってしまう。普段は不敵な態度をとったりもする妹だが、中身はとても繊細で脆い少女なのだ。

「でも、誠だってこのままでいいとは——」

「思っていないよ。ただ、優奈はまだ学校に通えなくなつた理由すら話せる状態じゃないのに、そんなふうには責めるのは酷いだろ」

「責めてなんて……分かったわ。お母さんも、ちよつと熱くなつていたかも。ごめんね、優奈」

「……いえ」

それは、誰に言ったかすら分からないような、短く、小さな声だった。

「分かってるんですよ、そんな事。妹だって馬鹿じゃないんです」

それから数十分後。

気になって優奈の部屋に入ると、案の定というか、妹はベッドの布団の中に包まってカタツムリになっていた。

「転校してどうにかなるなら妹、すぐにでもそう言ってます。それじゃ解決しないから不登校なんてしてるんじゃないですか」

放っておいても良かったのだが、それで自閉症になられても困るので、声を掛けてみたら最初こそ反応が無かつたものの、そのうち顔を出して愚痴り始めた。

「そもそも可愛い娘が不登校になってしまつているというのに、事もあろうにそれをサボってるなんて」

「自分で可愛いとか言うな。それに、可愛い娘だからこそ色々言つてやりたくなるんだろ」

「愛が重いです。妹に愛をくれるのは兄さんだけではないです」

「俺は元からお前に愛情を注いだつもりはない」

「……あの。妹、こう見えても結構傷ついてますから、ここは嘘でも優しくしてくれるとありがたいのですが」

「愚痴れる元気があれば十分だろうが」

さっきまでの死体が息をしているかのような状態に比べれば、今の優奈はいつもと同じようなくらいには見える。

といつても、本人も言っているように傷ついてもいるのだろう。一向に布団から出てくる気配が無い。……いや、それはいつもの事か。

「ところで、兄さん」

「何だ？」

「兄さんは、妹は学校に戻った方がいいと思いませんか？」

「……別に。行きたくないなら行かなくていいんじゃないか」

人生で一度しかない中学生活。そして、おそらくはその後に続く高校生活。当然、行けるのであれば登校する方がいいに決まってる。

だが、そうして無理に通ったところで嫌な思いをするのであれば、マゾでもない限り行く必要は無いだろう。

「……そう言ってくれるところが、兄さんですよ」

「一応言つとくが、俺はお前の理由を知ってるからそう言えるんだからな。母さんだって、ちゃんと説明すれば納得してくれると思うぞ」

「だから言ってるじゃないですか。妹を理解して愛してくれるのは兄さんだけでいいですって」

「……確かに俺は愛してるな、優奈を」

「えっ、本当ですか！？ ならもう結婚しましょう。法律的にはあと二年待たないといけません。気がしなくもいいです。取り敢えず今すぐ婚約しましょう」

「たった一言でどこまで暴走するつもりだ。嘘でもいいから優しくしろと言ったのはお前だろ」

「……妹、今度こそ本当に誰も信じられなくなりそうです」

「諦める。俺がお前にやれる愛情なんて家族愛くらいだ」
「愛情ならそれでもと言いたいですけど、やっぱり恋愛

感情がいいです」

よほど落ち込んだのか、一度は布団から出てきたというのに、またもぐり直した上に今度は顔まで引つ込めてしまった。

「……ま、そこまで元気なんだったら大丈夫そうだし、俺は部屋に戻るぞ」

「今まさに持ち上げて突き落とすという残酷な仕打ちを受けましたけどね」

恨みがましそうな声が布団の中から聞こえてくる。おそらくはいつものしかめっ面を浮かべているのだろう。

「……兄さん」

このまま居ても仕方ないので、部屋をあとにしようとしたところで、優奈が再び布団から顔を出した。

「その、さつきは母さんを止めに来てくれてありがとう

ございました」

「優奈……」

「——っ！」

言うが早い、また顔を引つ込めてしまった。

さらに翌日。

平日ではあるが、創立記念日だからで休みになったため、ぼつかりと一日暇になってしまった。

「何故それで妹はこんな日中から外に連れ出されているのでしょうか」

する事も無いので、土日にやっている優奈との散歩をする事にしたのだが、先程から何やら不満そうな雰囲気を出している。

「どうせ今日も一日中寝てるつもりだったんだろうが」

「何を言いますか。昨日の事もありますが、今日は学校に行こうと思ってましたよ」

「今、もう一時を過ぎてるぞ」

「重役出勤です」

間違いなく学校最底辺の存在がよく言う。

「大体どうして兄さんはわざわざ一番暑くなる時間帯に連れ出すんです。妹が苦しんでる姿を見て楽しむ性癖

でもあるんですか？」

「日傘さしてるだろ。むしろ俺の方が苦しんでるつての」
連日続く太陽光は、今日も街中を歩く人々を容赦なく焼いている。これで六月だというのだから、今年の夏は憂鬱だ。

「だから兄さんも日傘を持っていけばいいと言つたのに。頑なに拒むんですから」

「前にも言つただろ。俺がさしてたら変態に見えるんだよ」

「そろそろその堅い考えを壊してほしいですね。それと前から言おうと思つてたんですけど、妹のような派手な服を着て日傘をさしてる少女と並んで歩いてる時点で、兄さんは結構アブナイ人に見られてると思います」

「……いや、もう今さらだしそれはいい」

言われて初めて気づいた。確かにゴスロリ服を着た中学生女子が目立つのであれば、そんなのと一緒に居る自分も目立つのは当たり前だったのに。

「いつもの事だから、見慣れてたんだな」

小学校高学年になった頃には優奈の趣味がそっち方面になったから、誠の常識の中の一つに組み込まれてしまつていたが、冷静に考えてみれば、妹の服装は世間的にはあまり受け入れられていないファッションだ。

「なんでだろう。人目を惹いてるのが優奈だったから、おかしいと思われてるのも優奈だけだと思つてた」
「さらつと失礼な事言いましたよこの兄。しかし、なるほど。兄さんは普通の事だと慣れさせてしまえば異常なものも受け入れるわけですか」

残念ながら、そうかもしれないと思わずにいられなかつた。

「という事は、既成事実さえ作つてしまえば兄さんも妹との壁を——」

「いや、それは無い」

「だからどうしてそんな即答で断言するんですか！
もう少し夢を見させてくださいよ！」

自分で夢って言ってるじゃねえか。

いつぞやと同じく、日傘で突いてくるのを払いながら

歩く。見ようによつてはじやれているようにも見える二人の傍に、その車が停まったのはそんな時だった。

「ちよつと、いいか？」

突然、黒塗りの車が近くの路肩に停まったかと思うと、そこから降りてきた黒いスーツ姿の男性が二人、誠達の前に立ちふさがった。

「……兄さん」

さつきまでの元氣そうな姿が嘘のように静かになった優奈が、誠の後ろに隠れる。

「何ですか？ 補導員には見えませんか？」

「ああ、君には用など無い。あるのはその女の子の方だ」

「わ、私ですか？」

「何も訊かずに私達と来い。なに、悪いようにはしない」「え、えっ？」

黒服のうちの一人が無駄のない動きで近づいてきたか

と思うと、気づけば優奈の腕を掴んでいた。

「優奈！」

瞬く間に優奈を車のところまで連れて行ってしまう。慌てて追いかけて、黒服の手を払ってやった。

「……何だ、お前は」

「お前らの方こそ何なんだよ。いきなり現れたかと思つたら優奈を連れて行こうとしやがって」

「優奈？ ……そうか。偽名を使っているのか」

偽名？ 何を言ってるんだ、こいつは。

「とにかく、邪魔をしないでもらえるか。私達は急いでいるんだ。おい、古川」

「はい。……済まん」

「——ぐっ!？」

声を掛けられた方が——おそらくは部下だろう——上司と同じように無駄のない動きで詰め寄ると、誠の鳩尾に拳を叩き込んでいた。

「が、はっ、」

「兄さん！」

あまりにも重たい一撃。瞬時に意識が遠のいていく。気絶する瞬間、最後に見たのは目に泣きそうな顔をした優奈の顔だった……。

「——っ！——っ！」

誰かが遠くで叫んでいる。

聞き覚えのある声な気がして、誠はうつすらと目を開けた。

「……ここ、は？」

どこかのホテルだろうか。やけに広い客室。それなりに高級そうなインテリア。

気を失っている間に寝かされたのか、誠の体はダブルサイズの柔らかいベッドに横たえられていた。

「俺……っ！？ そうだ、優奈は！？」

徐々に意識が鮮明になっていくと、気絶させられる直前の記憶がよみがえってきた。

慌てて体を起こす。辺りを見回してみるが、室内には

誠以外に人の姿は見当たらない。

「優奈っ、どこ——」

「いい加減、解放してください！ 人違いだって言ってるじゃないですか！」

「——っ！？」

ベッドから降りると同時、隣の部屋から大声が響いた。

「優奈の声、だよな」

近くに置かれていた靴を履き、ドアを開けて室外へ。その間も優奈の大声が聞こえてくる。取り敢えずは無事なようだ。

「さて」

扉の前に立ち、一呼吸置いてからノックする。途端に室内での会話が止み、誰かがドアに近づいてくる気配がした。

「……起きたのか」

「あんたか」

開けたのは、先程拳を振るってきた黒服の男だった。

「さつきは済まなかったな。痛かっただろう」

「そう思うくらいならもう少し手加減してくれても良かったと思うけどな」

殴られた時もそうだったが、この男からはまるで敵意のようなものを感じない。そのせいも、普通なら警戒心を持って臨むべきなのに、どうしても気が緩んでしまう。

「おい、いつまでそこに居るつもりだ。さっさと入って来い」

彼が室内に入るのを見てみると、部屋の奥からもう一人の——声を掛けてきた方の——男の声が聞こえてきた。

「兄さん、無事だったんですね！」

続いて誠も部屋に入っていくと、優奈が座っていた椅子から立ち上がって駆け寄ってきた。

「良かった……っ。ずっと気を失ったままだったから、もうこのまま目覚めないんじゃないかって心配で……」

「勝手に殺すな。……悪かったな、心配掛けて」

「ぐすっ、まったくです。どれだけ私が気を病んだか。下手したら禿げるところでしたよ」

堪え切れなくなったのか、誠を見て緊張の糸が切れたの

か、よほどの事が無い限り見せない涙を流す優奈。それでもこうして口をつけて出てくる軽口は、少しでも強がろうとしているのだろう。

「……ふむ。そろそろいいか？」

だが、そんな優奈の感情など全く無視して、唐突に機械的な声が割り込んできた。

「お前達の家族ごっこに付き合っている暇は無いんだ。手短かに話をさせてもらおう」

「ちよ、黒田さん。いくら何でもいきなりそれは……」

「うるさいぞ古川。元はと言えばお前の責任だろう」

「……すいません」

黒田と古川。それが二人の名前か。

誠の予想通り、殴ってきた古川の方が部下で、黒田の方が上司のようだ。体つきは古川の方が体格がしっかりしているものの、黒田の方は高い身長と独特の雰囲気から何とも言えない威圧感を覚える。

「とはいえ、一応お前達には謝罪しておこう。悪かった。この通り、反省している」

「……」

言つて、頭を下げる。

そうして確かに黒田は謝意を示しているというのに、表情に変化が見られないためか、誠にはそれが白々しいものにしか見えなかった。

「今さらになつて。さつきまでしつこく訊いてきたくせに」

それは優奈も同じだったようで、両手でしつかり誠の服を掴みながらも眼光だけは黒田の方に向けて厳しい視線を投げていた。

「ああ、本当に人違いだと分かったからな。手荒な真似をしたのもある。お前達をこれ以上にここに拘束するつもりは無い」

「何ですかその態度は。それで本当に謝つてるつもりなんでしょうか」

「そのつもりだ。昔から俺は、謝るのが下手なんだ。……そうだな。気に入らないというのであれば、謝礼金も払おう」

「お金の問題じゃないですよ。どれだけ人を馬鹿にすれば——」

「——いいつて、優奈。そんなに突っ掛かるな」

「つ、けど、この人達のせいで兄さんはつ」

「だからつてお前がこれ以上何かを言つても何にもならないだろ。それより、今は話を進めよう」

「……はい」

納得できないのか、服を掴む手がさらに握りしめられる。けれど、誠の言つた事は間違つてはいない。この場でどれだけ言及しようと黒田は心にもない謝罪の言葉を並べるだろう。

「ふむ。坂本、誠と言つたか。お前とは話が合いそうだ」

「俺はそうは思わないがな。言つとくけど、俺だつてお前らに腹は立つてるんだからな」

「そうか、残念だ」

こいつ、わざとなのか？

相変わらずの白々しい態度に、誠は余計な話を省く事にした。

「それで、話つてのは？」

「ああ、そうだな。」

「まずはお前らを……正確にはその妹の方をさらつた理由だが、俺達は現在行方不明のある少女を探して街を歩いていた。すると、髪と眼の色こそ違えど、それ以外は瓜二つのやつがいた。そして、逃げられると厄介だからさっきのように有無を言わずに連れて行く事にしたんだ」

「優奈と、瓜二つ？」

「生き写しと言つてもいい。髪を染めて、カラーコンタクトでもつけければ同一人物に見えるほどだ。実際、その可能性を考えて俺達は捕獲する事にした」

「写真とかはあるのか？」

「もちろんだ。おい、古川」

「はい。……これだ」

胸ポケットから取り出された葉書ほどの大きさの写眞が手渡される。

そこに写っていたのは、一人の銀髪の少女。

黒田の言っている事が誇張でなかった事を示すかのように、優奈にそっくりな外見をした女の子だった。

エントランスを抜けて、外に出る。

時間にしてわずか六時間程度だが、久し振りに外の空気を吸った気分になった。

「大丈夫か？」

一息ついて、隣に並んで歩く妹に声を掛ける。

「……」

「……」

優奈は、誠が宥めてからずっと、一言も口にしていない。今もきゅつと口を閉じて、苦虫を噛み潰したようなしかめっ面をしながら前方を睨んでいる。……どうやらまだ怒っているようだ。

「優奈。そんな顔ばかりしてたら眉間に皺が寄るぞ」

「……」

「……せつかくの可愛い顔が台無しになってるぞ」

「……ならやめます」

すつと、不満気そうだったのが嘘のように無表情になる。

「そんな不愛想な顔してるやつとは歩きたくないな」

「……ふ、ふふふ」

ぎこちなくだが、口端を上げる優奈。といっても、ひくついている上に表情が硬いので逆に不気味だ。

……まあ、それでもさっきよりはマシか。

起こった表情よりは、無理やりでも笑っている方がいい。

「それにしても、永井グループか」

振り返り、遠くなつてしまったとあるホテルの方を見る。

先程まで誠達が居たのは、新市街の中でも一、二を争う高層ビルのホテルだった。建設したのは、永井グループという企業。詳しい事は知らないが、三年ほど前から急に有名になり、様々な分野に手を広げて成功を収めているところらしい。

黒田と古川はそのグループの専属ボディガードだと言っていた。道理で動きに隙が無かったわけで、二人は

永井グループが囲っていたある少女、橘透子の行方を追っているようだ。

「見た目からして特殊だよな」

こちらも詳細は教えてくれなかったので、分かっているのは渡された写真に写る外見の特徴だけ。

「しかし、見れば見るほどお前に似てるな」

黒田も言っていたが、どちらかが髪を染めて眼の色を変えれば間違い探しができるかもしれない。難易度は難しい。

「全然似てません。こんな人と妹のどこが似てるんですか」

「お前……笑ったまま悪口とか言うな。気味悪いぞ」

あ、落ち込んだ。

「つか、顔立ちも身長も体格も全部同じだろ。髪と眼を除いて違うところって言ったたら、服装と……胸か」

「なっ、ちよつと見せてください!」

写真をひったくると、そこに写っている少女の胸の部分と自分の胸を見比べる。

「……」

「服の上からだから正確には分からんが、多分その子の方が大きいぞ」

「……やっぱり、この人が悪の元凶だったんですね」
「……は？」

写真を持つ手が震えている。いつの間にか優奈の顔には作りものではなく本物の笑みがこぼれていた。ただし、悲願の宿敵を見つけた時のような笑みだが。

「この人が脱走なんてするからあの人達がやってきて、しかもそのせいで兄さんは痛い目に遭うし……橘透子、必ず見つけて報復してやります」

怨敵滅殺。この場に彼女が居れば間違いなく優奈の手によって葬られているだろう。

優奈にとっては幸いというべきか、透子はまだこの木戸市のどこかに居るらしい。永井グループから脱走したらしい透子は、その当日、土曜日の夜に商店街で発見されている。

「康太が言っていたのはこの子の事だったのか」

それからも度々目撃情報が市内にあり、どうやって日々を過ごしているかは分からないが、黒田達はこの近辺に住んでいると考えているようだ。

概ね、誠もその考えには同意するが、どうして逃げ出した彼女は遠くに逃げずにわざわざ掴まりやすい市内に居続けるのが分からない。

「それに、どうしてあいつらがこんな女の子を追ってるのかもな」

日本人離れた外見ではあるものの、それ以外はおそらく優奈と同じ年の何の変哲も無い少女。そんな個人に、今や大企業の一角になりつつあるグループが固執する理由も分からない。

「結局、分からない事はかりってわけだ」

黒田達からは見つけたら連絡をよこせと携帯の電話番号を教えられたが、使う事はまず無いだろう。

「さて、いつの間にか暗くなってるし、何か食って帰るか」

「そうですね。せっかくの兄さんとのデートも中断され

てしまっていましたし」

……やっぱり帰ろうかな。

その頃、ホテルの一室では。

「いいんですか、あんな子供達に話してしまつて」

「核心については何も言つてない。それに、あんなやつらでも情報源にはなる。だろう？」

「……抜かりなくやつておきましたよ」

「ならいい。行くぞ」

「はぐ」

翌日。

昨日、創立記念日によつて生まれた暇を使つて透子をもう一度外に連れて行くかと思つたのだが、先日の騒ぎ以降、透子はずっと不機嫌になつていていた。

「はあ」

理由を訊いても、ふてくされていのか反応してくれない。透子のように読心能力があれば、こういう時に困らずに済むというのに。

「二日ぶりだつてのに、また溜め息ついてるのか」

昼休みになり、いつものように午前中の授業を寝て過ごしていた誠が話し掛けてくる。

「今度はどんな悩み事だ？」

「別に。何でもない」

「何でもないのに溜め息とかつくなよ。幸せ理論じゃねえけど憂鬱な気分になるだろ」

「余計なお世話よ」

それに、憂鬱なのは間違つてないし。

一昨日に誠が言つていた事が正しければ、透子は人格が歪んでしまつていのではないか。そう考へて昨日は様子を見てみたのだが、ずっと不機嫌そうにしていた挙句、最終的には読みかけだった漫画を読み始める始末。参考になるとはとても思えなかつた。

幸い、その心配は透子にはばれていなかったみたいだ

が、本当にあの少女は歪んでいるのかが気になって仕方ない。

「スーパーでは全然そんな風には見えなかったんだけどな」

少なくとも、先日買い物に一緒に行った時には、人間嫌いにも、心を病んでいるようにも見えなかった。

「なんか、この前もそうだったけどお前、最近何かあったのか？」

「だから、何でもないって」

「……まあ、それならいいけど」

突き放し過ぎただろうか。

こちらに向けていた顔がまた机の上に乗っ掛かっていく。

「そういえば、」

かと思うと、再度体を起こした誠が鞆から何かの写真を取り出した。

「ちよつと変な事訊くけど、お前この女の子見掛けなかつたか？」

「女の子？ あんた、何しようとしてんのよ」

言いつつ、写真を受け取る。と、そこに写っていたのは、今まさに志乃の家に居るであろう透子の姿だった。

「……え？」

「一応言っておくが、俺は何もしようとしてないからな。ただ、その子を探してるやつに昨日会って、色々された挙句に協力？ みたいなもんを頼まれたんだよ」

「……ふうん。迷子なの？」

「いや、そういうんじゃないらしいけど……あれ、どう言うべきだ？ やっぱり迷子、かもしれない」

「いまいち要領が掴めないわね。そもそもその人、両親とかじゃなかったの？」

「あれが両親だったら法律的にアウトな気がするな」

「????? どういう事なのか分からないんだけど。とにかく、昨日あった事を話してくれる？」

「ああ、まず昨日は創立記念日で学校休みだっただろ？ それで……」

その後、説明が下手な誠の話を総合すると。

話だけは聞いていた誠の妹、優奈が透子とあまりにも容姿が似ていたため、永井グループから逃げ出した透子を追っていた人達が間違えて、一緒に散歩をしていた誠ともども誘拐まがいの凶事を働いたらしい。

「なるほど。災難だったのね」

「ああ。不登校になつてから少しでも回復させようとして外に連れ出してただけど、まさかこんな事に巻き込まれるとはな」

「いえ、妹さんじゃなくて、あんたの方よ。殴られたんでしょ？」

「ああ、それなら大丈夫。相手も素人じゃないから、内臓破裂するくらいには殴つてないはず」

そんな事になっていたら今日登校なんてできないだろう。

「何ともないならいいけど。それで、妹さんの方は完全に引きこもりになっちゃったの？」

「そこだけは怪我の功名というか、外に出た事を落ち込む前に他の事で怒り出したから大丈夫だと思う」

「怒るって、誰に？」

「その写真の子。名前、橘透子っていうらしいんだけど、その子が逃げ出したりしたから俺が殴られたりしたんだって怒ってたんだよ」

「……怒るところ、そこなんだ」

もしかして妹さんはブラコンなんだろうか。

「それで捜す事にはなつたのに、今日も家からは出なかつたけどな。それとこれとは別つて言つて、そもそも布団から出てこなかった」

「よく思うけど、自堕落な子なのね」

「まあ優奈の話は置いといて。結局、志乃はこの子について何か知つてないか？」

「……知らないわ」

正直な事を言えば、ここで誠にだけでも相談しても良かった。それをしなかったのは、透子を取り巻く状況を少しとはいえ知つてしまい、誠であっても居場所を教えるべきではないと思つたからだった。

「そうか。んじゃ何か分かつたら教えてくれ」

「はいはい。けど、その子を見つけてあんたはどうするつもり？」

「どうするって……連絡するんじゃないか？ 捜して
るって言うってし」

「……そう」

結果として、その判断は間違っていなかったようだ。

頼み込めば黙ってくれるかもしれないが、できる限り
誠には借りを作りたくなかった。

「それにしても、永井グループか。誠クンも厄介な人物
と遭遇していたみたいだね」

「なんだ、聞いてたのか康太」

「後ろの席で優奈さんの話をされればたとえ耳に詰め
物をしていても聞こえるに決まっているだろう」

「あんた、相手はまだ中学二年なんだけど」

それに加えて透子と似た容姿。康太はロリコンなのかも
しれない。

「志乃クン。僕はロリコンではない。優奈さんコンプレ
ックス、ユナコンなんだよ」

「勝手に人の考えてる事読まないでよ」

「つか何ドヤ顔で俺の妹を変な造語に利用してんだ」

「変などとはなんだ。僕の僕による僕のためだけの言葉だ
というのに」

「やかましい。南北まとめきれずに暗殺されてる」

「ア○リカが減びてもいいのか！」

「お前が統治してる時点で滅亡決定だろうが」

「あんた達、さっきから何の話してんのよ」

どうして康太が話に加わるだけでここまで脱線できる
んだろう。いつの間にか国レベルの話になってるし。

「まったく、これだから平民は。優奈さんの良さが分か
らないなら兄のポジジョンを替えてほしいね」

「誰が平民だ」

「もういいから。それより、永井グループが厄介ってど
ういう事？」

「そのままの意味だよ。世間からは三年前から注目を集
めるようになったみたいだが、元々あの企業はホテル経
営をメインに活動していたんだ。で、その本社がここ、

木戸市の新市街にある」

「まじか。それじゃ俺が昨日連れて行かれたのが……」
「今の本社だろうな。永井グループは、昔はただのしが
ない中小企業で、今みたいの高いホテルを建設できるよ
うな人脈も権力も無かった」

「どうでもいいけど、そんな情報どこから仕入れてくる
のよ」

「木戸市のデータベースと呼ばれた僕に知らない事な
んて無いよ」

「じゃあこの写真の子の居場所は？」

「……話を元に戻そう。」

そもそも、ホテル経営となると契約先との交渉や、人
脈確保が何より重要になってくる。社長の永井はそうい
った分野をそつなくこなしはするものの、決して敏腕と
いうわけでは無かった。そして、五年前について会社の
経営が苦しくなり、大量のリストラ社員が生まれた」

「要するに、倒産したって事か」

「ほとんどな。しかしそれから少しの後、何が起きたの

か、奇跡的に永井グループは経営を立て直す事に成功し
た。しかもそれ以降、会社の収益は常に右肩上がり。あ
つという間に名も無い中小企業は全国規模の存在にな
つたんだ」

「不思議な話ね。五年前に何があつたんだろう」

「未だにそれは謎だな。彼の能力はさつきも言った通り、
並みのものでしかない。何かあつたとしたら、とても有
能な部下が残っていて、起用してみたら大当たり、とい
つた事くらいだろう」

「有能な部下……」

「……まさかね。」

「つまり、厄介とか言つてたのは、そんな不気味でしか
も本社が目と鼻の先つていう会社だからか」

「もちろんそれもある。が、それだけでもない」

「まだ何かあるの？」

「これはまだ世間にも公表されていない事なのだが、今
週の頭から交渉していた取引相手が、とある大きな詐欺
グループだかもしれないという噂がある」

だからどうやってそんな情報を……いや、もう何も言わないでおこう。

「先延ばしにできない案件だったらしく、永井は三日間の話し合いだけで決断するという、スピード契約を結んだようだ」

「経過だけでもかなり怪しいじゃねえか。これで本当に詐欺だったらどうなるんだ？」

「もちろん、一気に傾くだろうね。どれほどの支出を行ったかは不明だが、そうそう安い金額でもなからう。そしてその事が明るみになれば、まず話題の台風の目は木戸市になる」

「なんか、お前の話を聞いてるとまじで気分悪くなってきた。嫌なのと知り合っちゃったみたいだな、俺達」

「ご愁傷様としか言えないがね。何事も無い事を祈ってるよ」

今度こそ完全に机に突っ伏す誠。

「……はあ」

その様子を横目に見ながら、志乃はまた大きな溜め息を

つくのだった。

とにかく、頭の中を整理しよう。

これまでの情報をもとに、自分なりに考えてみる。

まず、五年前に永井グループの危機を救ったのは、ほぼ間違いなく透子だろう。

康太も言っていたが、ホテル経営をするなら交渉事が大事になる。時には駆け引きだつてあるはずだ。そんな時、透子の能力はまさにうってつけだ。

完全な嘘発見器。どれだけ言葉巧みに騙しに来ても、一瞬で看破する事ができる透子が居れば、たとえ凡庸な男であっても、会社を立て直す事や、大企業にまでのし上げる事も可能だろう。

「でも、そこから透子が抜け出した事で状況は一変した」

軌道にも乗り、順風満帆だった船の舵取りだった透子が居なくなつた事に慌てた永井グループは、おそらくは全国規模で搜索しているのだろう。

どうして透子が脱走したのかは分からない。だが、時同じくして永井は詐欺グループと思しき団体と契約を結んでしまう。このままでは五年前とは比べものにならないほどの大惨事が起きる。それを防ぐために専属のボディガードまで捜索にあたらせたのだ。

「誠と妹さんは、本当にただ巻き込まれただけなのね」
容姿が酷似していたがために起きた不運な事故。しかし、そのおかげで今日、志乃は事前に透子の捜索が強化されている事を知れた。

「あとは今後、どうするかね」
引き続き透子をかくまうか、それとも永井グループのところに連れて行くか。

どの道、所在がばれるのは時間の問題だとは思う。ただ、その前に倒産してしまっていれば、透子を連れ戻す必要も無くなる。

簡単に言うとは、一人の少女を取るか、永井グループに関わる多くの人々を取るかの二択だ。
「え、何このドラマみたいな展開」

フィクションなら当然、一人の少女の方を選ぶだろう。しかし、現実問題それで永井グループが倒産すれば社員だけでなくその家族や取引先の会社までもが悲惨な事になる。迷う必要などどこにも無い。

「……そのはずなんだけどね」
ただ、唯一気になっているのが、透子が逃げ出した理由だ。それが分からないうちに、早々に決めるのは良くない。

『やめときなさいよ。それで透子が苦しい思いをしてきたなんて知ったら本当に迷うでしょ』

『何言ってるの。人数が多かろうが少なかろうが、同じ人間なんだし平等に扱われるべきよ』

「……」
頭の中で悪志乃と善志乃が言い争っている。

『これ以上あのわがまま少女に関わる必要だつて無いし、見放した方がみんな幸せなんだつて』

『そんなあたしの感情で透子のこれからの人生を苦しめるものにする事の方がわがままだと思っ』

『そうは言うけど、もしかしたらただの家出かもしれないじゃない。思春期なんだしさ』

『……』

あれ、善志乃の方があっさり負けた？

「……ま、ドラマのようにはいかないか」
方針は決まった。帰ったら透子連れて、永井のところに行こう。

「待ってましたよ、兄さん」

「……ただいま」

帰ってくる、今回はリビングではなく玄関に仁王立ちしていた。

帰宅時に優奈が自室以外の場所に居る事が、数日の間に二度もあるとは。

「それでは、帰って早々で悪いですが、行きますよ」

「どこにだよ」

「当然、透子とかいう女を捕まえにです」

「今朝寝てたじゃねえかよ」

「妹、眠い時はとことん寝るんです。でも今はそれほどでもない、あの小娘を捕獲しに行こうと言ってるんじゃないですか」

「お前も小娘だからな。それで、行くあてとかあるのかよ」

「取り敢えず新市街の方に行ってみようかと。土曜に商店街、月曜にショッピングモールで発見されてるわけ

すから、あっちの方を拠点にしてるはずですよ」

新市街だけでも人口十万人ほどはある。その中を徒歩で探すのはどう考えても非効率すぎる。

「つか、昨日のやつらだつて新市街の方を捜してるだろ」「あんな人達がいくら捜したつて見つかりません。それに、妹は自分の手で見つけたいんです。」

「そうか。なら頑張つてこい」

「とにかく行きますよ。定期と財布と携帯だけ持つて……」

「はい？」

「遠慮しとく。捜すならお前一人で行つてこい」

「な、なんですか。せつかく兄さんが帰ってくるのを待つてたのに」

「単純に嫌だからだよ。なんでわざわざ何の得にもならないのに、人捜しなんてやらなきゃいけないんだよ」

帰ってベッドに飛び込もうと思つていたために、結構眠気がやってきている。優奈ではないが、寝る時は寝たいのだ。

「得ならありますよ。妹のそっくりさんに会えます。可

愛いどころが二倍になるんですよ」

「そんな特定の誰かしか喜びそうにない利点は得とは
言わん。大体この前は似てないって言ってただろ」

「いいえ、そつくりです。顔も、身長も、体格も、……
胸も」

「最後のは違う」

「——っ、もう知りません！ 行ってきますす！」

顔を真っ赤にして出て行ってしまった。からかいすぎた
ようだ。

「気をつけてな」

しかし、何だかんだで優奈が一人で出掛けるのは、不
登校になってから初めてだった。

という事で、邪魔をするわけにもいかないのだが、だ
からと言って何かがあってもまずいので、気づかれな
いように尾ける事にした。

駅を出て、まず最初に日傘をさす。すでにもう西日が

傾いているのだが、習慣にでもなっているのだろう。こ
ちらとしてはいい目印だ。

街中を歩きつつ、しきりに左右を見回す優奈。ただで
さえ交通量が多い国道線沿いの道のため、反対車線側の
歩道は中々確認しづらい。

片側だけでは見つからないと思ったのか、横断歩道が
ある場所で信号待ちをする。近くに他に横断歩道が無い
ので同じ道を使うしかないが、ここで同じタイミングで
行くと見つかる可能性があるので、一回分待つ事にした。
「……しかし、本当にこんなんで見つけられると思つて
るのか、あいつ」

時刻は夕方。それでも人通りはそれなりに多い。確か
にこの中に絶対に居ないとも言いきれないが、居ない確
率の方が圧倒的に高い。

そうでなくとも、ただ練り歩くだけで見つかるのなら
黒田と古川の二人がとっくに見つけているだろう。

「つて、あれ？ ……しまった！」

そんな風に考え込んでいると、優奈を見失ってしまった。

どうせ遠くに行っても日傘が目印になるだろうからと油断していた。

「あいつの身長の高さを考えるのを忘れてたっ」

いくら日傘をさしていると言ってもさしている本人の身長が低ければ、遠くに行き過ぎると見つけられなくなる。

「す、すいません。ちょっと通して下さいっ」

急いで人混みを掻き分けて横断歩道を渡る。先に渡った優奈が左に歩いて行ったのは確認したので、とにかくそちらに向かって走り出す。

「くっそ、どこ行きやがった？」

信号一回分とはいえ、国道をまたぐともなればかなりのタイムラグになる。優奈の足はそれほど速くなかったが、走って追いかけているのに一向に姿が見えない。

「……まさか、また間違えて連れて行かれたんじゃない？」

昨日の今日ではあっても、優奈の外見は目立つ。永井グループの他の人間が勘違いをして攫ったのかも——

「そんなわけないでしょう。別の人が居る事くらい、連

絡がついてる筈です」

「——うおっ!？」

突然、背後から聞きなれた声が聞こえてきた。ついでに、背中に日傘での突き攻撃をくらう。

「あれだけ突き放しておいてついて来るなんて。ツンデレですか」

「優奈、いつから気づいて？」

「妹、兄さんの居場所ならいつでも分かるリーダーを搭載してますので。電車に乗る時には気づいてましたよ」

「そんなに前から……」

「まあ、尾行なんてしても素人だとすぐにばれます。気にする事ないですよ」

別にスパイになりたいと考えているわけでもないのに、そんなに気にはしていない。……していないが、そこまであっさりとばれていたのはなんだか……。

「それより、どうしてついて来たんです？ やっぱり妹の事が心配になりましたか？」

「いや。お前が行ったあとで、そういや今日は母さん達

帰ってこないんだっけって思い出したから夕飯食べる
ついでに様子を見てただけだ」

「素直じゃないですね。男のツンデレはみつともないで
すよ」

「女のもそうだと思うがな」

この前に康太が貸してくれた漫画にもツンデレと呼ば
れる類の女子が描かれていたが、いまいちあの性格の良
さが分からない。

「ふむふむ。兄さんはツンデレは好みじゃないんですね」

「おい、何書いてやがる」

いつの間に取り出したんだそのメモ帳。

「この兄さんメモも随分とページが埋まってきました
ね。そのうち、かさ増ししておかないと」

「どれだけ分厚くするつもりだ」

大体、何を書いたらメモが一冊埋まるんだよ。

「で、まだ続けるのか？ もうそろそろ日も沈むぞ」

「そうですね。こうなったら最終手段を取りましようか」

「最終手段？」

そんなのがあるのか。

何だろう。どこかの建物の高いところから見張ると
か？ あるいは走り回って行動範囲を広げるとか？

「聞き込みです」

「……」

「なんですか、その可哀想なものを見る目は」

「いや、そんなんで見つかるなら……いや、もういい」
というより、そもそも優奈に聞き込みなんてできるのだ
ろうか。

「ああ、だから最終手段か」

「何故でしょう。とても不愉快な事を考えられた気がし
ます」

こいつ、読心術が欲しいとか言ってたけど俺に関しては
要らないんじゃないか？

「さて、まずはショッピングモールの方に……？」

「……優奈？」

急に黙って、どうしたんだ？

「……見つけました」

「は？ 何を？」

「あの写真の子ですよ。あっち、反対車線の、喫茶店の前っ」

優奈が指し示す方向を見る。相変わらず人通りは多いが、本当に透子が居るならあの特徴的な銀髪が見えるはずだ。

「……居ないぞ？」

「兄さん、髪の色だけを探さないでください。あの帽子を被ってる女の子です」

「帽子？ ……あ、」

見つけた。優奈の顔をした、優奈そっくりの少女、透子を。

カツラを被っているのか、帽子から出ている髪は写真で見たものよりも短く、黒い。だが、ここからでは横側からしか見えないものの、それでも本人だと分かる。それほどに、彼女は優奈に似ていた。

「ふ、ふふふ。やつと見つけました。絶対に逃がしたりしません」

「変なスイッチ入れるな。とにかく、なんとかしてあっち側に行かないと」

左右を見てみるが、近くに横断歩道や連絡通路は見当たらない。しばらくは直線が続く場所だから注意して見ればここからでも見逃す事はないかもしれないが、脇道に逸れられてしまったらどうしようもなくなる。

「迂回なんてしてられません。車道を横切りましょう」
「やめろ。あっちが逃げる前にお前が追いかけれなくなるわ」

しかし、どうしたものか。

「……って、あれは？」

そうして誠達が思案していた時、透子に歩み寄る女子……志乃が居た。

「……で、どういう事だ」

すぐに志乃に電話を掛けて合流したあと、道端で話し込むのもという事になり、誠達は近くにあった志乃の家に

来た。

「お前、俺が訊いた時は知らないって言ってたじゃねえか」

「それは、あんたの話を聞いたあとで知ってるなんて言えないわよ。どう考えても危険そうだったじゃない」

「……ああ、確かに」

黒服の男の二人組が捜しているってだけで、十分危険だ。

「けど、いつあの子を拾ったんだ？」

「土曜日。透子が逃げ出した日に、商店街でね」

「……まだ夜の散歩、してるのか」

「まあ、ね」

志乃が夜な夜な散歩をしているのは知っている。

昔、小学校を卒業する頃に母親を事故で亡くして悲しかった志乃は、中学生に入った直後にやってきた新しい母親と、変わり身の早い父親に反感を持つようになった。以来、坂本家と同じく共働きの二人が帰ってくる夜遅くに、志乃は顔を合わせないように外に出て散歩をするようになった。それが何にもならないと分かっているながら

も、志乃はその逃避を三年以上続けている。

けれど、そんな夜中に女の子が一人で歩き回っているのが安全であるはずもなく……ある日、不良グループの男達に絡まれて、志乃は乱暴をされ——そうになった。

「あんなの、本当に偶然だったんだから、いい加減やめろって言ってるのに」

「その件に関しては本当に感謝してる。あんたが来てくれてなかったら、嫌な記憶どころか、多分自殺してた。それくらい、あの頃のあたしは精神が脆かったし」

「……」

「……」

「……はあ。やめようぜ、この話」

「……そうね。もう終わった事なんだから」

言い聞かせるように呟く。未だにあの時の事を思い出すと心中穏やかではいられないらしい。

「それより、あれが妹さんのね。確かに似てるわ」

無理やりの話題転換。そう分かった上で、誠はその話に乗った。

「俺も最初に写真を見た時は本当に驚いたよ」

今はその本人が志乃の部屋に居る。優奈が二人きりで話したいと言ったので、誠と志乃はリビングで話す事になったのだ。

「にしても、二人きりになって何を話してるんだろいな」

「そうね。優奈さん、透子に怒ってたらしいし詰問攻めにでもしてるのかな」

「してるのかなって、ドライなんだな。一緒に居て情とか湧かなかったのか？」

「……あまりね。一緒に居たって言っても、五日くらいだし、結局は他人だから」

「他人……」

「他人には干渉しない。するべきじゃない。面倒事を抱えているならなおさらだ」でしょ？」

「お前にそれを言われると何も言い返せないな」

他人に対する不干渉。それは、誠が小さい頃から持つ基本理念であり、通常はこの考えに基づいて行動してきた。

話し掛ける必要が無ければ誰にも話し掛けない。雑談なんてもつてのほか。何かを頼まれても本人で解決できそうなものなら手伝わない。できなさそうでも、自分以外の人に頼むように促す。

「いいじゃない。あんたの気まぐれのおかげであたしは生きてるんだし」

そうして生きてきた誠が、それでも世話を焼き、自ら関わりに行くのは妹の優奈だけだった。優奈だけは、誠が純粹でお節的な性格をしていた時を知っている。それだけが理由というわけではないが、家族である妹だけは例外だった。

その例外が増えたのは二年前。たまたま志乃が不良達に連れて行かれるところを、誠は見掛けてしまった。最初は自業自得だ、俺には関係ないと無視しようとしていた。だというのに、気づけばその場を離れようとしていた足は後ろを向いていて。

「あの時は驚いたんだぞ。やつちまった、とか思ってた女子が同じ高校で同じクラスに居たんだから」

「そうは言うけど、ここらへんで距離的にちょうど良かった高校があそこしかなかったのよ。わざわざ他の高校に通うのも面倒でしょ」

面倒とか言い出したよ。

「やっぱり、新市街に住んでるやつは考え方が違うな」
「変わらないわよ。あんたと似たような事しか考えられない……だからこそ、今日あんた達に見つかったんだから」

「志乃？」

どうして急に沈んだかと思えば、自嘲気味に笑ったりするのだろう。

「なあ、志乃——」

「兄さん！」

だが、その理由を訊こうとした瞬間、透子を連れて優奈がリビングにやって来た。

「どうした。もう用事は済んだのか？」

「え、ええ。……数字の力は絶対だと思ひ知りました」

「？？？？」

こっちも薄ら笑いを浮かべている。何なんだ本当に。

「って、それより大変なんです。この子、読心術が使え
るみたいなんですよ」

「は？ お前は何を言ってるんだ？」

何をしていたらそんなとち狂った事を——

「ううん。優奈さんの言ってる事は本当。透子は、他人
の心が読める能力を持つてるの」

「志乃まで……いや、取り敢えずまずは話を聞こうか」

「……なるほど」

二人から話を聞き、ついでに誠自身も試してもらった結果。確かに透子は他人の考えている事が分かるようだ。

「ああ、それでこの前、あんな質問してきたのか」

「心が読めたらってやつ？」

訊かれた時は謎でしかなかったけれど、そういう事だったのか。

「それにしても、その能力って生まれつきなのか？」

「は、はい。昔からそうです」

「ふーん……見た感じ、普通だけだな」

容姿の事を除けば、至つて普通の少女に見える。

「まあ、中にはそういうやつも居るつて事か」

「? ? ?」

「あの、さつきから兄さんは何を納得してるのでしょうか、透子さん」

「それが、わたしの様子が普通の人と変わってないのがおかしいみたいです」

「はあ。そんな事を。うちの兄が失礼しました」

「……」

心の中を読まれるのは、中々に難儀だな。迂闊に考え事もできない。

「そう考えると、志乃はすごいな。五日も透子と過ごしてたんたるか?」

「五日『しか』よ。もっと長くなつてたらあたしだって嫌になつてたかもしれないし」

「いや、俺だったら一日だけでも一緒に暮らそうなんて

思わないから。自分の考えが一方的に知られるとか、嫌すぎる」

「私もです。ただでさえそっくりなのに……ほとんど」

……何をしてたのか、分かつた気がする。

「まあでも、これで永井グループがどうして透子に固執するのかが分かつたな」

心を読む能力なんて、大抵のビジネスに利用できる。ホテル経営でもその例には漏れないだろう。

「永井さんの事、知ってるんですか?」

「いや、本人には会つてない。けど、その部下になら会つた。黒田と古川つてやつらだったけど、知ってるか?」

「はい。黒田さんは永井さんを、古川さんはわたしを警護してくれる人です」

「まじか」

もしかしなくても、透子はお嬢様なのか?

「いえ、普通の家庭生まれの一人娘です」

「……そうか」

「やつぱりあんたもお嬢様かともか思つたの?」

「そりや、ボディガードがついてたとか言われたら少しくらいそう考えてもおかしくないだろ」

つか、『も』って事は、志乃もそう考えた事があるのか。

「あの、古川さん、元氣そうにしてましたか？」

「少なくとも体を壊したりとかはしてないと思う」

そうじゃなかったら、あのパンチは打てない。

「仲、良かったんですか？」

「はい。古川さんがわたしの専属になるまで、入れ替わりが激しくて仲良くなる前に他の人に替わってたんですけど、古川さんはずっと居てくれたんです」

「性格の相性が良かったのかな」

昨日見た限りでは、真面目そうな人に見えた。案外、誠実な人が透子とは反りが合うのかもしれない。

「でもそれじゃ、どうして逃げ出したりしたんだ？」

「それは——」

「待って」

「………志乃？」

「それを聞いて、どうするつもり？ 透子が永井グルー

プに戻るのとは変わらないんだし、ここで事情を知ってしまつたら、さらに巻き込まれる事だつてあるのよ？」

「………志乃さん」

「それでも訊くの？ ただの興味本位なんだつたら、やめといた方がいいわ」

「志乃は、もう聞いたのか？」

「いいえ。聞いても仕方がないと思って、ついさつき永井グループに連れて行こうとしてた」

「………そうか」

確かに、志乃の言う通りだ。

なにせ、一つ間違えれば日本の大企業の一つを潰しかねないような話だ。下手に知り過ぎて、目障りな存在と認知される可能性もある。

「……」

他人に干渉しない。そう決めて、今まで生きてきた。そして当然、透子は他人だ。

ここで話を訊く事にもあまり意味は無い。強いて言うなら、それこそただの興味からくる欲求を満たす事くら

いでしかない。

「……そうだな。それならやめておく」

『関係ない話』なら、昨日のような偶発的な事故でもない限り、巻き込まれる事はない。これ以上、透子と関わるのは――

「嘘つき」

静かな、それでいて突き刺すような声。

「兄さんの嘘つき」

「優奈？」

「透子さんみたいな能力が無くても分かります。兄さんが本当の本当は、聞いておきたいと思っっている事くらい」
「……そんな事ねえよ。面倒事に巻き込まれたくないだけだ」

「何年兄さんの妹をやっていると思ってるんですか。むしろ、面倒事を抱えていれば率先して助けてあげる、それが本来の兄さんのはずです」

「……」

「私、今の兄さんも好きですが、昔の兄さんの方がもっ

と好きでした。だから、今だけでももう少し素直になっ
てください」

「……優奈」

「……優奈さん」

……素直に、か。

優奈は昔からでも、志乃の時は違う。もしも徹底して他人への不干渉を貫いていたなら、気まぐれだろうと助けたりはしなかったはずだ。

「……分かった。俺の負けだ」

どうせここで嘘をついても、透子が居るのだからすぐにばれる。今さら無駄に足掻こうとは思わなかった。

「……少し、いいでしょうか」

「何です？」

「その、優奈さんと誠さんは兄弟ですから、好きでも付き合ったりはできないと思います」

「――んなつ!？」

「……」

「え、さっきの好きってそういう意味だったの?」

「何ですかこの不意打ち。というか、助け舟を出したというのに恩を仇で返すなんて、この人、私よりも性格悪くないですか？」

「いや、ジャンルの違いはあるけど同じくらいだと思うぞ」

「ぐふっ」

つか、さりげなく私よりと言ってるって事は自分が性格悪いのは自覚していたのか。

「……ふう」

「どうした、志乃」

「いえ。さすがだなんて思ってる。ちゃんとあんたの事を理解してる妹なんだなあって思ったのよ」

「……かもな」

一番近くて、一番大事な存在。誠にとってそれは優奈であり、優奈にとっては誠なのだ。

「えっと、まず、わたしは生まれてから小学校に入る頃

まで、橘家で両親とわたしの三人家族で住んでいました」
場が落ち着いて、話せる状況になったところで、誠達は透子の話を聞く事にした。

「何も他の家とは変わらない、ごく普通の一般家庭だったと思います。ただ違ったのは、わたしがおかしな能力を持っていた事と、お父さんがその当時、お母さん以外の女性と仲良くしていた事くらいでした」

父親の浮気。勘づいた母親は、何度も問い詰めたらしい。

「その頃のわたしは、まだ自分の能力で見えているのは人の心の中だとは思っていなくて。それに、誰にでも見えているものだと思っていたので、ついお母さんに言うてしまったんです」

それは、浮気相手の名前。

「一瞬でした。気づけばお父さんは居なくなっていて、私はお母さんとの二人暮らしになってしまいました」

住むところも通う学校も変え、仕事をするようになって出掛ける事が多くなった母親と二人だけの生活。少な

いお金で、それでも母子家庭として彼女達は二年間を過ごした。

「最後の頃になると、お母さんは滅多に家に帰らなくなりました。二日に一回、夜中に帰ってくるくらいでした」

「お父さんから養育費とかは出なかったの？」

「分かりません。でも、お母さんはいつもお金の事を考えていました」

働けど働けど、母一人に娘一人を養うだけで精一杯な料金しか手に入らない。その上、学校に行かせるための費用も掛かる。正確な時期は分からないが、いつから母親は借金をするようになった。

「そして、その額が返済不可能となったお母さんは、一人でどこかへ行ってしまいました」

いわゆる、蒸発というやつだ。

その後、母親が金を借りていた先、永井グループの人間がやってきて、全てを差し押さえた末に、透子連れで行ってしまった。

「人質にするつもりだったみたいです。行方不明になっ

たお母さんとの交渉手段に使えるかもしれないって」

「……酷い」

「それで、お母さんは？」

「……」

首を横に振る。つまり、そういう事だ。

やがて、透子は施設にでも預けられる事になるはずだった。だが、当時の見張りであった社員が、透子の能力の存在に気づき、その事を永井に伝えてしまった。

永井からすれば、瓢箪から駒だったに違いない。これを利用しない手はなく、永井はすぐに動き出した。

「わたしが心を読むには、その人が見える範囲に居なければいけません。社員達を使ってそれをテストした永井さんは、電話越しにわたしと話しました」

「永井は、何て言ってきたんだ？」

「これから先、永井さんを騙そうとする人達の嘘を見抜いてほしい。嘘は絶対にいけない事なんだ、と」

普通に考えれば怪しいと思う。けれどその頃はまた小学三年生。見慣れない場所に連れて来られて、曲がりな

りにも社長をしている永井の声を聞けば、それを無条件で信頼するのも仕方なかった。

「それからの五年間、わたしは永井さんと話している人だけが見える場所で、その人が何を考えているのかを伝える事をしていました。それ以外の時間は、専用に用意されたホテル内の一部屋で警護の人と話をしたりしていました」

「……」
それでどうしてここまで何の支障も無い子が生まれるんだ？

思わず、そんな事を言ってしまうようになる。言わなくても透子には読まれているのかもしれないが。

「……永井さんのところに来る人達は、全員が嘘をついてばかりでした。そのうちわたしは、この能力を持って生まれたのは、こうしてみんなの嘘を暴いていく事なんじゃないかと思うようになりました」

嘘をつく事は悪。嘘をつく人は悪い人。そんな意識が定着していく。

何より、透子をそんな境遇に追いやった元凶は、浮気をした父親と、透子を見捨てて逃げた母親だ。その二人とも、相手こそ違えど、人を騙していた。

「ですがある日、わたしは偶然、話をしている時の永井さんを見てしまいました。……嘘だらけの言葉を吐く、永井さんを」

「……透子さん」

「それから、わたしは何が何だか分からなくなって。とにかくこのままここに居たら駄目だと思って、逃げ出そうと決めたんです」

五年もの間、閉鎖的な生活を強いられても自我を失わずに居てこれたのは、嘘を見抜くという使命感に依るものだった。

そのきっかけを作った永井が嘘に塗れていた事で、精神の拠り所を見失ってしまったのだろう。

「けど、逃げ出そうと決めたって言っても、一人でどうやって外に？」

「古川さんが手伝ってくれたんです。部屋の鍵を持って

いたのは古川さんで、部屋から出ればあとと客に紛れて
玄関口から出れるだろうって」

「……あの人が」

正直、殴られた身としてはあまり好感は持てないのだが、
そんな一面もあったという事か。

「そのあと、本当なら古川さんの家に行くはずだったん
ですが、場所を忘れてしまつて迷子になつていた時、志
乃さんに出会つたんです」

「……なるほどね」

そうして、家に泊めていた志乃だったが、誠と康太の
話を聞いて、やはり透子を永井グループの下に返した方
がいいと判断したという事か。

「重ねて言うけど、あたしはこの話を知らなかつたんだ
からね」

「分かつてるって。こういう重い話だと判断が鈍るから
聞かなかつたんだろ？」

今回、誰が悪かと言えば間違いなく永井だ。いくら会社
が潰れそうだったからといって、人を騙して道具のよう

に扱つていいわけがない。

五年前の時点で、自分が社長の器ではないと諦めきれて
いたなら、こんな事にはならなかつたのだ。

「それにしても、そんな事があつたのにどうして透子は
永井のところ連れて行かれるのを抵抗しなかつたん
だ？」

「志乃さんにそうすると言われたら、わたしはもう他に
行くところもないわけですから」

「それで、透子の話を聞いてしまったわけだが、志乃は
どうする？」

「どうするって……」

「まだ永井のところ連れて行こうと思つているのか、
透子の逃避行に協力するかつて事だよ」

「……協力するに決まつてるでしょ」

「そうか。優奈は？」

「焚き付けておいて自分だけ傍観というわけにもいき
ませんからね。ちゃんと手伝いますよ」

「オツケー。それじゃ、これからどうしていくかだけど

—

P r r r r ……

「ん、電話？」

突如鳴り出したのは、誠の携帯電話。ディスプレイには見覚えの無い十一桁の数字が並んでいる。

「もしもし」

『よう、俺だ』

……黒田だ。

「何の用だ？」

『駄目じゃないか、ちゃんと見つけたら連絡してくれて頼んだらどうか？』

「……どういう意味だ？」

「どういう意味も何もない。お前は橘透子を見つけた。そしてその事を俺に連絡せずに、今は澄谷志乃が住んでいるマンションの一室に居る。違うか？」

「急に電話をしてきたと思つたら、何だよそれ。俺は今自宅に居るが？」

『下手な嘘はやめろ。そこに居る橘の信頼を失うだけだ

ぞ』

「……」

どういう事だ？ どうしてこのタイミングで、まるで見ているかのように？

『もう要済みだから教えといてやる。お前が古川に気絶させられて運ばれたあと、気を失っている間に携帯に盗聴器を内蔵させてもらった』

「……つまり、今までの会話も筒抜けって事か」

『そういう事だ。古川の裏切りには俺も驚いたが、すでに再起不能にしておいた。これからやつは一生、車椅子の生活を送る事になるだろうな』

「……」のっ

携帯の軋む音が聞こえる。いつの間にか、右手に力がこもっていた。

『すでにお前達の場所まで来ているんだが、開けてくれないか？』

「——っ！」

先手を打たれていた。

志乃の家は五階の東端に位置する。出入り口は一つしかなく、窓から外に出る事もできない。

『早くしてくれ。俺は気が短いんだ。最悪、ドアが吹き飛ばかもしれん』

「……分かった」

となれば、あとは一つしかない。強行突破だ。

携帯電話を窓から放り棄てると、志乃達に短く事情を説明する。ドアを開けると同時に誠が黒田を引きつけ、その間に他の三人が逃げ出す。集合場所は坂本家。

優奈が反対してきたが、時間が無いので無視をし、玄関の方へ移動する。

「それじゃ、行くぞ」

ドアノブを掴み、回転させる。

「黒田あつ！」

勢いよく開け放ち、そこに立っていた黒田に襲い掛かった。……が、

「駄目じゃないか、大人を呼び捨てにしたら。教えてもらわなかったのか？」

予想していたのだろう。全く動揺する事無く、あつけなく誠は地に伏せられていた。

他の三人も、あまりの事に動けないでいる。直観的に、逃げてでも無駄だと悟ったのだ。

「……こちら黒田。橋を確保しました。これより護送します」

無機質な声で連絡を取り終えると、何の言葉も無く、黒田は透子を連れ去ってしまった。

翌日。

「はあ」

「……なんだか、後ろの席からの溜め息が増えた気がするよ」

康太の呆れたような声。

「あれか。ついに志乃クンのが誠クンにうつったのか」

「風邪じゃないんだから、そんなのあるわけないでしょ」
「ふむ。それで、何があつたんだい？」

「お前に話してもな。つか、誰に話してももう遅いとい
うか」

「はあ」

「そうね」

透子は連れ去られ、仲間だったと判明した古川は木戸市
立病院で集中治療室に入院中。幸い、誠は痛みが残るだ
けで支障がでるほどではなかった。

「……その様子だと、二人が抱えてる悩みは同じ事のよ
うだね。おそらくは、昨日の写真の子か」

「正解。良かったな」

「何だねそのリアクションは。僕がせっかく相談に乗っ
てやろうとしているのに」

「要らない。あんたに話したところでどうにもならない
し。しばらくしたら収まると思うから気にしないで」

「気にすると言われても……まあ、もし困ってるなら
いつでも力になるよ」

「ああ、ありがと」

どうしたらいいのか分からず、康太はしきりに首を傾げ
ながら自分の席に座り直すしかなかった。

授業が終わったあとの、帰宅途中。

「……あれは、優奈さん？」

永井グループが経営しているホテルの前で、愛用の黒い

日傘をさして立っている。

何をしているのか、ずっとそのまま居るので、声を掛けてみる事にした。

「優奈さん」

「あ、志乃さん、ですよ。昨日はどうも」

「いえ。それで、ここで何を？」

「透子さんの場所を教えてもらおうと受付の人に訊いたんですが、知らないの一点張り。あの様子だと多分、社員全員が彼女の事を知っているというわけではないみたいですね」

「……」

「志乃さん？」

「あ、ごめん。なんか、聞いてたのと違うなって思ってた」

「はい？」

誠から聞いた話では、優奈は当時の同級生とのトラブルによって人間不信に陥り、長い間ほぼ引きこもり生活を送っていると言っていた。自分からは部屋から出ようとせず、放っておけば一日中ゲームと睡眠だけを行って

いるような子だと。

「透子を助けようと思ってるの？」

「ええ。私そっくりの人が辛い目に遭ってるのが嫌だというのも理由の一つですが、何となくあの人は、兄さんに似ている気がするんです」

「誠に？」

「昔、兄さんは今となっては考えられないくらいにお人好しで、世話焼きな性格をしていたんです。元々の器量も良く、友達に頼まれた事は何でもしてあげる優しい人でした」

「確かに、今の性格からは考えられないわね」

「正反対にしたような人格者だ。一度は助けてもらった志乃でも、そこまでは想像できない。」

「けれど、成長していくにつれて、環境に違和感を覚えるようになったんです。自分は利用されてるだけなんじゃないか、と。そして、事実その通りでした」

「……」

「それを知った兄さんは、一時期本当に何もできなくな

りました。声を掛けられても身動き一つしないくらいに。しばらくして何とか回復した時には、もう今のような考えを持つようになっていました」

「……『他人には干渉しない。するべきじゃない。面倒事を抱えているならなおさらだ』」

「はい。ですが、今でも兄さんは私の面倒は看てくれます。その部分だけはまだ変わっていないくて、お節介なところが消えてないんです」

誠の事を話す時の優奈は本当に誇らしげな表情をしていました。それほど、好きなんだろう。

「……だから、まだ不登校を続けてるの?」

「……それはまた別の話です」

「……そう」

けれど、その愛情はあまりにも強すぎて、間違った形をとってしまいかもしれない。志乃にはそんな風にも思えた。

「でも、そのどこが透子と似てるの?」

「何というか、何も知らない時に好きに利用できるよう

にされて、そのあとで利用されていただけだっけ分かってしまうところが」

「ああ、なるほど」

つまり、透子はちょうど利用されていただけだったと気づきかけている。このまま放っておけば、誠のように抜け殻になって、最悪壊れてしまうかもしれない。

「そうなるか、とにかく透子の居場所だけでもはっきりさせておかないとね」

「え、あ、そうですね」

「しつかりして。情けないけど、あたしさつきまで透子の事諦めかけてたんだから」

「そうだったんですか?」

「まあ、大人の世界つてのには手出しできないと思ってたしね。だから、やる気をくれて、ありがと」

「……はい」

何をするかは決まっていなくても、それでも腹は決めた。必ず透子を助けてみせる。

志乃の携帯に、誠から電話が掛かってきたのは、その

直後だった。

情に動かされてここまで来たのだ。

「えっと、古川、古川。……あつた」

放課後すぐに来たので、まだ面会時間は残っている。

目的の場所にたどり着き、病室に入ると院内に入った時から微かに感じていた薬品臭が強くなった気がした。

「おい、生きてるか」

「……ああ、お前か」

両足複雑骨折に加え、様々箇所痛々しくくらいに包帯が巻かれている。生きてるのが不思議なくらいだ。

「何しに来た？」

「いや、特に何も無い」

「そうか」

「……」

「……」

短い会話。そして沈黙。

本当に何をしに来たのだろうか。見舞いならそういった品を持ってくるべきだっただろうに。

「……橘の事だが」

時同じくして。

誠は木戸市立病院に来ていた。

理由など特に無い。自分でも分からない何かしらの感

どうしたものかと悩んでいると、先に古川の方が口を開いた。

「私には家族というものが居なくてな。橘を警護しているうちに、彼女を娘と思うようになった」

「そりやまた身勝手な話だな。利用してただけだったのに」

「そうだな。私がやってきた事はただの独り善がりだったのだろう。彼女には悪い事をした」

「……」

「私もまた、他の者と同じようにさつさと橘の警護を解任してもらっていれば、こんな事にはならなかった」

「こんな事って、あんたは透子を外に出した事を後悔してるのか？」

「当たり前だ。何不自由ない暮らしから、突然一人で外に出され、中途半端に知らなかった外の世界を知り、そして無理やりまたあそこに閉じ込められた。以前までなら感じなかった事、我慢できた事も、これからはそうはいかなくなるんだ」

「じゃあ、透子にはあそこでずっと箱詰めに使われてれば良かったとも言うのかよ」

「こんな事になるくらいなら、いつその方が幸せだったのかもしれない」

「……俺はそうは思わないけどな」

「……何？」

「ずっと利用されるだけの日々が、幸せだとは思えねえって言うてんだよ。何が不自由ない暮らしだ。軟禁して、騙して利用するために餌付けしてただけだろう」

「そんなのは、頼み事を引つ切り無しに持ってきて、感謝の言葉を言えば何でもしてくれると思ってるやつらと同じだ。」

「透子と一緒に居たのは志乃だけだな。あいつは透子と暮らしてる間、ずっと彼女の事を気に掛けてた。それも、余計な事だったって言うのか？」

「……」

「あんたより、あいつの方がよっぽど透子の事を考えてる。今だって、どうしたら彼女を救えるか考えてるはず」

だ。勝手に理想を押し付けて、失敗したからあととは後悔してただけで満足していたいならそうしてろ」

「……坂本」

「彼女はもう気づき始めてた。あんたが何かをしなくても、どの道苦しむ事になってただろう。大切に思ってるなら、その時にこそ傍に居てやるべきだろうが」

あの時、俺の傍に居てくれたのは優奈だった。ほとんど事情を知らないのに、それでもあの妹は傍に居続けてくれたんだ。

「じゃあな。一応礼は言っとく。ここに来て、俺のやるべき事が決まったからな」

「待て、坂本」

「……何だ。これ以上、あんたと話す気は——」

「これを持っていけ。あのホテルのマスターキーだ」

病院をあとにし、まずはあのオタクに電話をする。

「ああ、そういう事だ。悪いけど、頼む」

『了解した。貸し一つとしておこう』

「……優奈の事以外なら返してやるよ」

『ちつ……まあいい。それではまた明日』

用件だけ伝えると、康太は即諾してくれた。

とにかく、準備は整った。あとは志乃に連絡を取って、透子を助けに行くだけだ。

B R E A K O F F